

地下資源調査所

部 冊

圖 書

地質調査所報告

第四十號

資料室

松方五郎氏



MAR 5 1925

地質調査所報告第四十號

大正二年三月

目次

蘭領印度及緬甸ノ石油業調査報告

一頁

蘭領印度及緬甸石油業調查報告

蘭領印度及緬甸ノ石油業調査報告

本官曩ニ蘭領印度及緬甸ニ於ケル石油業調査ノ命ヲ受ケ明治四十五年二月一日東京ヲ發シ同十九日新嘉坡ニ着シ便船ノ都合ニヨリ同地ニ滞在スルコト數日、同二十七日蘭領印度ノ首都「バタビア」ニ到着セリ、而シテ瓜哇及「ボルネオ」島ノ石油產地ヲ巡回スルコト約二ヶ月ニシテ其一斑ノ調査ヲ終へ、更ニ「スマトラ」島南部ノ「バレムバン」ニ渡航シ同地方ノ油田并ニ製油ノ狀況ヲ探リ四月下旬再ヒ新嘉坡ニ歸航シ、直チニ緬甸ノ首都「ラングーン」ニ渡航シ約二週間ヲ以テ同國ニ於ケル油田ノ視察ヲ遂ケ歸途「ピナン」ヨリ「スマトラ」島北部ニ渡リ「ランカアト」油田地方ニ立寄り五月二十七日新嘉坡ニ出テ六月十二日無事歸朝セリ、茲ニ其調査ノ結果ヲ報告ス

大正元年八月

農商務技師 伊木常誠

蘭領印度及緬甸石油業調查報告

目次

緒言	一頁
第一章 蘭領印度ノ石油業一斑	五頁
一 沿革	五頁
二 油田ノ分布	七頁
三 石油會社	九頁
四 生産額	二〇頁
五 製品ノ輸出入	二六頁
六 燈油ノ價格	三〇頁
七 製油場及輸送	三二頁
八 油質	三三頁

九	鑛區所有權及税金	三四頁
第二章	蘭領印度ニ於ケル油田	三五頁
一	「ボルネオ島」サンガ、サンガ」油田	三五頁
二	「ボルネオ島」ニ於ケル其他ノ油田	四七頁
三	「バリババン」製油工場	四九頁
四	瓜哇島東部ノ油田	五三頁
甲	「プロラ」油田	五四頁
乙	「チュプー」製油工場	五八頁
丙	「ヲノクロモ」油田	五九頁
丁	「グリセー」油田	六二頁
五	「スマトラ」島ノ油田	六三頁
甲	南部油田	六四頁
乙	北部油田	七二頁

第三章 英領緬甸ノ石油業一斑……………七五頁

一 沿革……………七六頁

二 生産額……………七八頁

三 石油會社……………八二頁

四 原油ノ製造……………八三頁

五 製油場……………八五頁

六 輸出入……………八九頁

七 緬甸ニ於ケル燈油ノ消費高及價格……………九二頁

八 鑛區所有權及税金……………九四頁

九 政府ト石油業……………九四頁

十 氣 候……………九五頁

第四章 緬甸ニ於ケル油田……………九六頁

一 「エナンジアン」油田……………九六頁

二	「シングー」油田……………	一一二頁
三	「エナシジャト」油田……………	一一三頁
四	「ミンブー」油田……………	一一六頁
五	「アラカン」州ノ産油地……………	一一八頁
結	尾……………	一一八頁

蘭領印度石油產地分布圖

第一版



蘭領印度及緬甸ノ石油業調査報告

緒言

抑今回ノ目的トスル所ハ南洋地方ニ於ケル石油ノ生産力ヲ調査シテ本邦石油業者ノ參考ニ供シ併セテ油田地質ノ如何及石油現出ノ状態ヲ究メテ本邦油田ト對照シ我油業發展ノ料ニ資センカ爲ナリ、元來我邦ニ於ケル石油ノ消費高ハ一年約千萬函其價額實ニ二千萬圓ニ上リ國油ハ僅ニ其三分ノ一ヲ供給スルニ過キスシテ其他ハ米油及蘭領印度油ノ輸入ヲ以テ之ニ充ツ、故ニ我邦ニ於ケル燈油ノ價格ハ常ニ外油ノ支配スル所トナリ若シ一朝其間ニ競爭ヲ惹起スル下キハ國油モ亦其渦中ニ投セラレ、コト一昨年ノ如クニシテ我石油業者ノ蒙レル損害蓋シ少シトセス、從テ他ノ商工業ニモ累ヲ及ホスコト明カナリ、是ニ於テカ從來最モ祕密ニ附セル蘭領印度油ノ生産力ハ如何、又蘭領印度油ハ果シテ米油ニ對シテ拮抗シ得ルノ生産

力ヲ有スルヤ否ヤ等ヲ調査スルノ必要ヲ生セリ、翻テ本邦ニ於ケル石油業ヲ概觀スルニ近年ニ至リ漸次衰微ノ傾向ヲ來タセリ、若シ夫レ將來大油田ノ發見セラル、ナクンハ遂ニ我國產七百萬圓内外ニ上レル燈油ハ之ヲ外國ニ仰カサルヘカラサルニ至ルヘシ、是レ本官ノ近キ將來ニ於テ石油ニ對スル諸種ノ問題ノ提出セララルヘキヲ豫想スル所以ニシテ今回ノ調査ハ一ハ以テ之カ參考資料ニ供センカ爲ナリ

右ノ目的ヲ以テ渡航シタレトモ蘭領印度ノ石油業ハ極メテ祕密ニ附スルヲ以テ本官ハ「バタビヤ」ニ着シ我領事ト熟議ノ結果到底一人トシテハ各地ノ事業ヲ參觀スルコトノ不可能ナルヲ知り、領事ノ紹介ヲ得テ總督府鑛山局長ニ面會シ具サニ我目的ヲ語り石油會社ヘノ紹介ヲ求メタルモ局長ハ其無效ナルヘキヲ告ケタリ、因テ本官ハ更ニ領事ト議シ「ポイトンブルグ」ニ赴キテ蘭領印度總督ニ面會シ本邦駐劄和蘭公使ノ書面ヲ示シテ其來意ヲ語りタルニ總督ハ直チ

ニ「ローヤルダッチ」石油會社長ニ本官ヲ紹介セリ、本官ハ卽チ辭シテ同會社ヲ訪問シタルニ、偶社長不在ニシテ祕書役ニ面會セリ、彼レ本官ノ要求ヲ快諾シ書面ヲ與フヘキ由ヲ告ケタレハ本官ハ「バタバア」ニ滞在シテ之ヲ待テリ、然ルニ其後毎日言ヲ左右ニ託シテ書面ヲ送り來ラス、遂ニ四日ノ後ニ至リテ社長不在ノ故ヲ以テ各工場參觀ノ許可ヲ與フルコト能ハサル旨ヲ以テセリ、是ニ於テ本官ハ其不都合ヲ咎メ更ニ一重役ニ面會ヲ求メ祕書役ノ然諾ヲ信シ斯ク時日ヲ費ヤシテ其許可ヲ待テル旨ヲ告ケ特別ノ待遇ヲ受ケンコトヲ求メタルモ祕書役同様ノ言ヲ繰返シ事遂ニ破談ニ終ハレリ、是ニ於テ止ムヲ得ス本官ハ意ヲ決シテ單獨ニ各產油地及工場ヲ巡回シ或ハ外部ヨリ、或ハ監視人ノ目ヲ隠レテ内部ニ進入實查シ、或ハ其地方ニ住スル同胞ニ意ヲ含メテ探知セシメ、或ハ蘭人ノ石油業ニ關係シタル者等ヲ訪問シ以テ種々ノ材料ヲ蒐集セリ、斯クテ「ボルネオ」東部、瓜哇地方ハ一部分ナリトモ視察スルコトヲ得タレトモ、「スマトラ」島ニ至リテ

ハ石油坑場ノ一端ヲモ窺フコト能ハサス、而シテ「ローヤルダッチ」石油會社ハ雷ニ本官ニ實地ノ參觀ヲ許可セサルノミナラス本官ノ行程ヲ各地ニ通報シテ警戒スルニ至リテハ其祕密主義モ亦極マレリト云フ、シ

蘭領印度ヨリ去テ緬甸ニ赴キ三井物產會社ノ紹介ヲ以テ各石油會社ニ就テ工場ノ參觀ヲ求メシモ、是レ亦祕密主義ニシテ多クノ會社ハ拒絕セリ、唯最大ナル緬甸石油會社ノミ特別ニ參觀ヲ許可セリ、然レトモ極メテ表面的ニシテ製油場ノ如キハ僅々二時間ノ縱覽ヲ許シ、石油坑場ノ如キモ本官ノ現場ニ到着スルヤ直チニ事務員ノ居宅ニ伴ヒ自由ニ調査セシメス、偶野外ニ出テ、多少自由ニ調査スルノ途ヲ開クモ鑿井者等ニハ既ニ意ヲ含マシメタルヲ以テ何レモ口ヲ緘シテ多クヲ語ラス、又「エヂェント」ニ問フモ更ニ要領ヲ得ス、一言以テ之ヲ掩ヘハ極メテ巧妙ナル手段ヲ弄シ參觀ヲ許可セルモノナリ、右ノ如キ事情ナルヲ以テ今回調査ノ結果ハ隔靴搔痒ノ感多ク唯當

ラスト雖モ遠カラサル的ノ視察ニ過キサルハ甚タ遺憾トスル所ナ
リ

蘭領印度石油業ノ斯クノ如ク祕密ニ附セラレ、所以ノモノハ種々
ノ原因アルヘキモ要ハ米國スタンダート石油會社トノ競争ノ結果
何人ト雖モ社長ノ承諾ヲ經タルモノニアラサレハ事業ヲ參觀セシ
メサルノ規定ヲ設ケ本官モ之カ爲メ拒絕セラレタルニ外ナラス、緬
甸ニ於ケル石油業ハ已ニ米油ト協定スル所アルヲ以テ其祕密トス
ル所ハ蘭領印度トハ趣キヲ異ニシ各會社共ニ只他ノ侵入攪亂スル
ヲ恐ル、ニアルカ如シ

第一章 蘭領印度ノ石油業一斑

一 沿革

蘭領印度ノ瓜哇島及スマトラ島ニ石油ノ存在スルコトハ既ニ百年以
前ヨリ知ラレタリト雖モ新式ノ機械鑿井法ニ據リ採油ニ著手シタル
ハ千八百八十五年即チ今ヨリ二十八年前ナリトス、千八百八十七年ニ

ハ東部瓜哇ニ根據ヲ有スル「ドール」石油會社 Dordische Petroleum Mij. 組織セラレ千八百八十九年ニ至リ製品ヲ市場ニ賣出セリ、是レ蘭領印度油ノ市場ニ現ハレタル嚆矢トス、其翌年ニハ「スマトラ」島北部ヲ根據トセル「ローヤルダッチ」石油會社 Koninklijke Nederland Mij. tot exploitatie van petroleumbronnen in Nederland Indie 成立シ製油場ヲ「バンカラン、プランドン」ニ建設シ大ニ石油事業ヲ經營スルニ至レリ、之ヨリ蘭領印度ノ石油業ハ次第ニ發展シ同會社ハ更ニ千八百九十七年ニ「スマトラ」島ノ南部「バレムバン」州ノ油田ヲ開發セリ、之ト相前後シテ「ボルネオ」島ノ東海岸ニハ英國「サミューエル」商會ノ手ニヨリテ「サンガ、サンガ」油田開發セラレ、同商會ハ又「バリバ」ンニ製油場ヲ設立シ盛大ニ經營セリ、爾來蘭領印度ノ石油事業ハ大ニ世人ノ注目スル所トナリ多數ノ石油會社勃興シ起業シタリシカハ其産額ハ年々増進シ今ヤ將ニ東洋方面ニ於テ米露油ト相拮抗セントスルノ勢力ヲ有スルニ至レリ、而シテ近年蘭領印度ノ諸石油會社ハ殆ント悉ク「バターフシー」石油會社 Batavische Petroleum Mij. ト稱スル一大石油「シ

シテケートノ買收スル所トナリ統一セラル、ニ至リタルヲ以テ益々
斯業ノ基礎ヲ鞏固ナラシメタリ

二 油田ノ分布

從來蘭領印度ニ於テ石油ヲ産スルハスマトラ島ノ南部及北部、瓜哇島
ノ東部並ニボルネオ島東海岸一帶ノ地ニシテ其他石油ノ痕跡ハ尙所
々ニ存スルモ未タ開發セラル、ニ至ラス

スマトラ島北部ノ油帶ハ東海岸ニ沿ヒ北ハアチー州、イデイヨリ南
ハ東海岸州ノランカフトニ至ルマテ延長約九十餘哩ニ亙リビール
ラ、ペラ、ベシタン及テラガ、サイド等ニ於テ採油ス、此地方ヲ構成ス
ル地層ハトブレル氏ニヨレハ恐ラク第三紀ノ中新期ニ屬シ主ニ粗
砂岩及泥灰質頁岩等ナリ、スマトラ島南部ニ於テハバレムバン州ノ中
央部ニ位スルムアラエニム及ムシイ川上流地方ニ一帶ノ豐富ナル産
油地アリ、而シテ此等ハ尙北方ヂヤムビイ州ニ連亙スルモノ、如ク目
下所々ニ試掘セリ、地質ハ下部バレムバン層(砂岩、頁岩、石灰岩ヨリ成リ

第三紀中新期ニ屬ス)、中部「バレムバン」層(砂岩、頁岩ヨリ成リ石炭ヲ挾有
ス)第三紀最新期ニ屬ス)及上部「バレムバン」層(凝灰岩及砂岩ヨリ成リ最
新期ニ屬ス)ヨリ構成セラレ、主トシテ中部「バレムバン」層中ニ石油ヲ胚
胎セリ

瓜哇島ノ石油產地ハ東部ノ「スマラン」州、「レムバン」州及「スラバヤ」州等ニ
アリ、此地方ニハ多クノ油脈アリテ東西ニ併走セリ、此他「マヅラ」島及瓜
哇ニモ所々ニ石油ノ露面アリテ試掘セラレタル箇所少ナカラサレト
モ未タ油田トシテ開發セラレタルモノヲ見ス、此等ノ産油地々方ヲ構
成スル地層ハ(中新期ニ屬スルモノニシテ上部(石灰岩)、中部(泥灰岩)及下
部(角礫岩)ノ三層ニ分タル、而シテ主ニ中部若クハ上部、中部ノ境界ニ石
油ヲ胚胎シ稀ニ下部層ニ含蓄セルコトアリ

「ボルネヲ」島ノ石油帶ハ其東海岸ニ沿ヒ北ハ英領ニ近キ「タラカン」島ニ
始マリ「サンクー」ラン「灣」ノ「ミアン」島ヲ經、夫ヨリ本島三大河ノ一ナル
「マハッカム」川ノ河口(此地方ヲ「コーテイ」ト呼ビ川ヲ「コーテイ」川トモ云

フニ互リ尙南方ニ延ヒテ「バリババン」ニ達シ其延長實ニ三百三十哩内
外ニ互レリ、而シテ目下油田トシテ開發セラレタルハ「タラカン」島及「コ
ーテイ」地域ノ「サンガ、サンガ」ヨリ「サムボジャ」ニ至ル間ニシテ「ミアン」島其
他ハ試掘中ニ屬ス、地質ハ砂岩及頁岩ノ互層ヨリ成リ屢巒岩ヲ挾有シ
又所々ニ石炭ヲ埋藏ス、而シテ地層ノ走向ハ大略海岸ニ平行シ北々東
ヨリ南々西ニ走レリ

三 石油會社

蘭領印度ニ於ケル石油會社ハ數年前ヨリ漸次「ローヤルダッチ」石油會社
ノ變態タル「バターフシェー」石油會社ト稱スル一大「シンヂケート」ノ爲メ
ニ買收セラレ目下石油事業ノ經營ハ直接若クハ間接ニ該「シンヂケ
ート」ノ手ニ歸シ殆ント統一セラル、ニ至レリ、蓋シ此事タルヤ米油ニ對
抗スル準備ニシテ「ローヤルダッチ」石油會社カ非常ナル決心ト大資本ト
ヲ以テ決行シタルモノナリ、實ニ蘭領印度ニ於ケル石油事業ノ發展上
一新紀元ヲ開キタルモノト云フヘシ

今左ニ在「バタビア」染谷領事ノ調査ニ據リ蘭領土ニ於ケル石油會社組織ノ大要ヲ述ヘン

鑛區所有者ハ先ツ一會社ヲ組織シテ原油採取ニ著手シ有望トナレハ製油會社ニヨリ買收セラル、製油會社ハ之ニ對シ若干ノ資金ヲ鑛區所有會社ニ仕拂ヒ、原油ノ採取及運搬ハ被買收會社ヲシテ之ヲ爲サシメ、原油ハ其數量ニ應シ一定ノ價格ヲ以テ之ヲ買入レ、製油ハ之ヲ中央「シンヂケート」ニ協定價格ニテ讓渡シ「シンヂケート」ハ之ヲ消費地ニ販賣スルモノトス、斯クテ被買收會社ハ買收金ヲ以テ資本ヲ償却シ其後年々産スル所ノ石油ノ數量ニ應シ一年ノ配當金ニ若干ノ高低ヲ生スルモノニシテ「ドーツ」石油會社ノ如キハ僅々三十五萬盾ノ資本金ヲ以テ成立スルモノナレトモ採油權ヲ有スルコト大ナルカ爲メ、其權利ヨリ生スル利得ハ一ケ年資本金ノ七倍以上ノ配當ヲ容易ナラシメタリ

右述ヘタルカ如ク蘭領土ニ於ケル石油會社ハ一大「シンヂケート」ノ爲

メニ買收セラルト稱スルモ單ニ該「シンヂケート」ノ自由ニ委スルノ權
 利ヲ買收セラル、ノミニシテ實際多數ノ會社ハ今尙存立セリ、左ニ昨
 年ノ調査ニ係ル會社名其資本金及配當率等ヲ列舉セン

會社名	資本金(盾)	一九一〇年 配當率	產出		創立年	摘 要
			一九〇九年	一九一〇年		
Batawsche Petroleum Mij.	八〇,〇〇〇,〇〇〇				一九〇七	一九〇九年ノ配當率 割六分五厘
Batawiasche Petroleum Mij.	三二,〇〇〇				一九〇八	
Dordische Petroleum- Industrie Mij.	三〇,〇〇〇,〇〇〇	特九分			一八九七	一九一〇年改造、特 ハ特種株
Dordische Petroleum Mij.	三五〇,〇〇〇	七割餘	一一六、四七九	一三九、九二六	一八八七	
Dutch East Indies Petro. Co.	六〇〇,〇〇〇				一九一〇	
Geconsolideerde Hollandsche Petroleum Compagnie.	二四,〇〇〇,〇〇〇	一割			一九〇七	
Holland Borneo Petro. Mij.	五,〇〇〇				一九〇三	
Java Petroleum Mij.	二,〇〇〇,〇〇〇		四六五	四九八	一八九七	

Koningslijke Nederland Mij. tot exploitatie van petroleumbronnen in Nederland Indie.	100'000'000	普二割八分 特四分	六七〇、五一六	八〇九、二七四	一八九〇	普ハ普通株 特ハ特種株
Langsar Petro. Mij.	八〇〇'〇〇〇				一八九九	
Mij. tot Mijn Bosc en Landbouw exploitatie in Langkat.			一三五、〇六六	一二三、一六一		一九一一年ノ産出高「リター」
Nederland Indische Mij.						
Oost Borneo Mij.						
Petro. Mij. Boekit Lintang	一〇〇'〇〇〇				一九〇九	
Petro. Mij. Gaboes	廿二〇'〇〇〇		一、八〇〇	一、三三〇	一八九二	
Petro. Mij. Kalipating.	一〇〇'〇〇〇				一九〇五	
Petro. Mij. Moeara-Banim	七、五〇〇'〇〇〇	一割五分			一八九七	
Petro. Mij. Moesi-Illir	九、六〇〇'〇〇〇		一二、五〇〇	一二、一〇五	一九〇一	

Petro. Mij. Rembang	五〇〇、〇〇〇					一八九七	
Petro. Mij. Zuid-Perlak	三、〇〇〇、〇〇〇	普八分 特八分 ^十 / _十	六二、八〇八	三九、九一五	一九〇六	普ハ普通株 特ハ特種株	
Sumatra Petro. Co.	二、四〇〇、〇〇〇				一八九九		
Tarakan Petro. Mij.	三、九〇〇、〇〇〇	一割					

以上諸會社中最モ廣ク鑛區ヲ有シ最モ生産高ノ多量ナルハ「ローヤル
 ダッチ」石油會社 Koninklijke Nederland Mij. tot exploitatie van petroleumbronnen in Nederland Indie
 ニシテ、之ニ次ク「ドイツ」石油會社 Dortische Petroleum Mij. トシ、之ニ次ク「
 南」ペラ石油會社 Petroleum Mij. Zuid-Perlak トナス
 「ローヤル」ダッチ石油會社 ハ千八百九十年ノ創立ニ係リ「スマトラ」島東
 海岸州、「バレム」バン州及「ボルネオ」島東海岸等ニ廣大ナル鑛區ヲ有シ、製
 油場ヲ「スマトラ」島ノ「バンカラン、ブランダン」及「バレム」バンニ設置シテ
 盛ンニ石油事業ヲ經營シ來リシカ、千九百七年「ボルネオ」島東海岸ニ於
 テ操業セル「サミューエル」商會ノ變身 Nederland Indies Industrie en Handels Mij. 實ハ

Shell Transport and Trading Company ト協議シ其所有ニ係ル總テ、鑛區ヲ買收シ之ヲ併合シテ「バターフシェー」石油會社ト稱スル。「シンデケート」ヲ設立セリ、其資本八千萬盾ニシテ總計五株トシ「ローヤルダッチ」石油會社ハ三株「シエル」會社ハ二株ヲ所有セリ、而シテ油田ノ經營、製油業ハ「ローヤルダッチ」石油會社之ヲ擔當シ、製品ノ運輸販賣ハ「シエル」會社總テ之ヲ擔當シ、東洋ニ於ケル販賣ハ特ニ Asiatic Petroleum Company ナルモノアリテ之ヲ司レリ、本邦ニ於ケル「ライジングサン」商會モ亦「シエル」會社ノ變名ニ外ナラス「ローヤルダッチ」會社ノ資本等ニ就テハ染谷領事ノ調査報告アリ、左ノ如シ

「シンデケート」ノ石油會社ヲ買收スルヤ「ローヤルダッチ」石油會社之ニ任シ、自身ノ株券ト「シエル」會社ノ株券トヲ適宜ニ配合提供シテ賣主ニ渡シ、此株券ハ券面額ノ五倍以上ノ價アルヲ以テ會社ノ買收費ナルモノハ案外低廉ナルノミナラス、其株券ハ三四年間一定ノ價格ヲ以テ「ローヤルダッチ」石油會社ニ買取ルヘキ優先權ヲ保留スルヲ常トス

ルモノ、如クナレハ本會社ノ株券ハ自然少數ノ株主間ニ保セラル、傾向ヲ有スルモノトス

「ローヤルダッチ」石油會社ノ一昨年十二月現在ノ拂込資金ハ四千四百四十一萬八千盾(總資本金一億盾)ニ過キサリシカ、昨年米油ト大競争ヲナセシ當時東部瓜哇ノ「ドローツ」石油會社ヲ買收スルコト、ナリ三百八十二萬盾(「シエル」會社ハ之カ爲メ新株二十五萬磅ヲ發行セリ)ノ新株ヲ發行シ、別ニ「ドローツ」石油會社重役ニ對シ新株二十萬盾ヲ贈與シ、又同年中「ロスチャイルド」家ノ經營ニ係ル「ノサエチー、カスピエネー」外一會社ノ買收費トシテ三百九十萬盾ノ新株(「シエル」會社ハ二十四萬磅ノ新株ヲ發行セリ)ヲ發行セシノミナラス、「シンデケート」ノ有スル埃及「ゲムサー」油田、「ドローツ」石油會社ノ事業改良費、露國「ウラル」、「カスピアン」方面ニ於ケル石油ノ採取及「ルーマニア」ニ於ケル油井産額増加ニ伴フ設備費ニ供スル爲メ四分五厘利付優先株二百八十五萬盾ヲ發行シタルヲ以テ、其内後者ヲ除去スルモ本會社ノ資本ハ昨年未ニ

五千二百三十三萬八千盾ニ増進シタルモノトス
 「ローヤルダッチ」會社ノ千九百一年ヨリ一昨年ニ至ルマテノ配當率ヲ舉
 クレハ左ノ如シ

年	普通株	優先株	年	普通株	優先株
一九〇一年	二四%	四%	一九〇六年	七三%	四%
一九〇二年	二五、八五	四	一九〇七年	二七、七五	四
一九〇三年	六五	四	一九〇八年	二八	四
一九〇四年	五〇	四	一九〇九年	二八	四
一九〇五年	五〇	四	一九一〇年	二八	四

「ローヤルダッチ」石油會社ノ協力者タル「シエル」會社ノ一昨年ノ拂込資金ハ
 三百五十萬磅ナリシカ昨年内ニハ四百四十九萬磅ニ増加シ之ニ本年
 募入ノ五十一萬磅ヲ加フルトキハ總計五百萬磅ノ巨額トナルニ至レ
 リ

「ドート」石油會社 ハ千八百八十七年ノ創立ニ係リ資本金三十五萬盾

本社ヲ「スラバヤ」市ニ置キ東部瓜哇ニ其根據ヲ有シ「スラバヤ」市ノ近郊
 「ヲノクロモ」「レムバン」州「チユブ」及「スマラン」市ノ三ヶ所ニ製油場ヲ建
 設シ自己鑛區ノ產油ハ勿論、他會社ノ產油モ殆ント總テ一手ニ買收製
 油シ製品ハ主トシテ瓜哇内地ノ需用ニ充ツ、本社ノ千九百年來ノ配當
 ハ左ノ如シ

一九〇〇年	四〇、八%	一九〇五年	三二、八%
一九〇一年	二八、二	一九〇六年	四二、五
一九〇二年	一九、一	一九〇七年	五五、〇
一九〇三年	三一、八	一九〇八年	六五、八
一九〇四年	三四、〇	一九〇九年	七四、八

本社ハ又千八百九十七年瓜哇ノ石油業ヲ統一スル爲メ「ドーツ」石油工
 業會社 *Dortische Petroleum Industrie Mij.* ナルモノヲ創立ス、其資本金三千萬盾ニ
 シテ拂込資金千八百萬盾、特種株一萬二千株(七分利付券面額五百盾)、普
 通株一萬二千株(七分利付券面額千盾)ヨリ成リ積立金百八十萬六百三

十五萬盾ヲ有ス、然ルニ該會社ハ昨年「ローヤルダッチ」石油會社ノ新株三百八十二萬盾ト「シエル」會社ノ新株二十五萬磅トヲ以テ「シンヂケート」ノ爲メニ買收セラル、ニ至リシコトハ前ニ述ヘタルカ如シ、該會社ノ最近五ヶ年間ノ配當率ハ左ノ如シ

普通株

特種株

一九〇六年

〇、九

〇、九

一九〇七年

一、二

一、二

一九〇八年

一、四

一、四

一九〇九年

一、六

一、六

一九一〇年

〇、九

〇、九

米國「スタンダード」石油會社ハ蘭領印度ノ石油ニ著目シ既ニ起業ノ噂アリシモ本官ノ巡回當時ハ東部瓜哇ニ一部ノ鑛區ヲ得「チユブ」ニ事務所ヲ置キ將ニ事業ニ著手セントセリ、聞ク所ニヨレハ近時該會社ハ二千二百萬盾ノ巨額ヲ投シテ一會社ヲ設立シ瓜哇石油會社「Java Petro-

Leuna Mij.ヲ買收セリト云フ、此他ニハ未タ事業ニ著手セルヲ聞カス
 本年四月中旬ニ於ケル蘭領諸石油會社株ノ價格ハ左ノ如シ(百盾ニ對
 シ)

「ドローツ」石油會社

普通株	一六七、二五
特種株	一七〇

「デコンソリヂールデ、ホルラント」
 石油會社

舊株	三一五
新株	二九八

「ローヤルダッチ」石油會社

甲株	五三二、五
乙株	五二八
丙株	五二八、五
丁株	一〇〇

「ムアラエニム」石油會社

二三九

「ペラ」石油會社

八六、三七

「スマトラ、バレムバン」石油會社

一九〇、七五

「タラカン」石油會社

南「ペラ」石油會社

特種株

一二五、五
七九、七五

東「ボルネオ」石油會社

八〇

四 生産額

蘭領土ニ於ケル石油ノ產出ハ開發以來年々増加シ千九百三年即チ十年以前ニハ總計八十七萬噸内外ニ過キサリシカ、一昨千九百十年ノ總計ニ據レハ總計百五十萬噸即チ大約二倍ニ増進セリ、而シテ世界中ノ產油國トシテハ露西亞ニ次キ第三位ニアリ

蘭領印度石油生産額(噸)

瓜哇島

州名 鑛區名 會社名

スマラン州

{Klantong
Sojomerto
Tjiplook

Java Pet. Mij.
Dord. Pet. Mij.

計

一九〇八年

一九〇九年

一九一〇年

四〇一

四六五

四九八

八

八

八

四〇九

四七三

五〇六

レムバン
州
及スマラン

	Pet. Mij. Gadoes			
Bapo		一、八一六	一、八〇〇	一、三三〇
Tinawoen	Dordl. Pet. Mij.	四七、八三七	四七、一〇三	四七、五三一
Parokan	"	二五、六一一	二六、五四一	二五、二三五
Djepon	"	一、八五五	三、二九二	八、七五三
Toengkoel	"	二、五七八	九〇八	八三
Banjoebang	"	三、五五五	二、一二六	三、〇七〇
Plantoengen	"	四一六	五一五	七八七
Kalipitang	"	七五〇	六九七	五七三
Trembes	"	一、八九九	七	
Tjandi	"	三九		
Wonasari (1)	"		一、〇〇五	一、〇九三
Noord Ngawen (1)	"		一、八四五	一、一七九
Gegenoeang (1)	Koning. Nederl. Mij.			二六二
計		八六、五三六	八五、八三八	八九、八八六

州名	鑛區名	會社名	一九〇八年	一九〇九年	一九一〇年	
ス ラ バ ヤ 州	Djabokota	Koning, Nederl. Mij.	二一四	六九	四五九	
	De Twalf Dossa's	"	一四、六九一	二〇、一三四	一八、一二二	
	Lidah Koelon	"	八、七二〇	八、六三二	六、八四九	
	Metatoo	"	三、九〇五	一、一九八	六〇九	
	Made	"	二〇、六六九	二、四〇〇	二五、五八五	
	Pekiton	F. Ellinger			五、八一四	
	Goenoeng Sarie	Koning, Nederl. Mij.	五〇			
	計			四八、二四九	三二、四三三	五七、四三八
	スマトラ島					
		Moeara Enim	Koning, Nederl. Mij.	一九〇八年	一九〇九年	一九一〇年
	Babat I	"	一一二、六五〇	一三〇、八三一	一〇九、〇六三	
	Bandjar Sarie	"	一四、五四六	二二、二〇〇	三二、二四一	
	Palembang	"	二〇、九〇二	一一、三三三	一一、三〇六	
		"	一五、九五二	一三、二一九	一三、五一二	

バンタン州

東
ア
チ
エ
海
岸
州

Soengei Ramok (1)	"			一五二
Karang Ringim	Mij. Moosi Iir	一四'三三六	一二'五〇〇	一二'一〇五
Belani 1	"			
Selaro	Nederl. Ind. exploitatie. Mij.	八三八	六三六	三四八
Ladang Pait	"	三'六三四	二'九四八	二'五二二
Lematang	Exploitatie Nederl. Mij.	二五'三三六	一八'一一〇	二二'一五四
Arahan	"	五'一九四	一三'一一五	九'二八九
Soeban Djeringi	Koning. Nederl. Mij.	一〇五'五一六	一三三'六二五	一〇〇'四四六
	計	三二八'八〇三	三六〇'四九七	三二一'一三七
Pendawa	Koning. Nederl. Mij.			
Oast Pendawa	"	二'四三六	二'二九六	二'〇二四
Telaga Said	"		七'七一四六	七'七〇五
Boekit Mas	"	九'四九三		八二
Boekit Sintang	"		六	四六五

計	三八一、〇七九	四一、五〇五	一、一八〇
總計	計一、二五四、七八八	一、四五三、一四三	一、五〇〇、二四二

此統計表ハ蘭領印度政府鑛山局ノ各石油會社ノ屆高ニ基ツキ調製シタルモノナレハ深ク信ヲ措クニ足ラサレトモ亦石油業ノ大勢ヲ察スルニ足ルヘシ、蘭領土中最モ多量ニ產出スルハ「ボルネオ」島ニシテ之ニ次クヲ「スマトラ」島トシ瓜哇ハ遙カニ其下ニアリ、本官ノ今回調査セル結果ニ依レハ各地ニ於ケル一日ノ產出高ハ大略左ノ如シ

「ボルネオ」島全部

二、五〇〇—三、〇〇〇噸

瓜哇島全部

六五〇

「スマトラ」島南部

一、〇〇〇

同 島 北 部

一、〇〇〇(想像)

即チ總計五千五百噸内外ニシテ之ヲ一年ニ通算スレハ百九十八萬噸ニ當レリ、是レ素ヨリ漠然タル材料ニ基ツキ計算セル數量ナリト雖モ

近來產出高ノ著シク増加セルコトハ事實ニシテ大約一年間二百萬噸
即チ本邦產額ノ七倍餘ト見做セハ當ラスト雖モ蓋シ遠カラサルヘシ

五 製品ノ輸出

蘭領土ニ於テ製造スル燈油ハ瓜哇島製品ノ全部及「スマトラ」島製品ノ
一部ヲ内地ノ消費ニ充テ其他ハ殆ント悉ク外國ニ輸出スルモノナリ、
輸送販賣ハ「シエル」會社之ヲ引受ケ東洋各地ハ輸出先ニテ「アシアチック」石
油會社ニ引渡シ適宜販賣セリ

一 昨千九百十年ニ於ケル蘭領土ヨリノ燈油ノ輸出高ハ左ノ如シ(以下
政府ノ統計ニ據ル)

自「ボルネオ」島「バリババン」 一一五、九四〇、一四四「リートル」

自「スマトラ」島「バンカラン、ブランダン」 一八六、五七六、五五四

自同島「タンジョン、プーラ」 二八、九七四、三二〇

自同島「バレムバン」 一五八、二四四、三四三

計 四八九、七三五、三六一

其輸出先ハ左ノ如シ

國名	數量(リートル)	價額(盾)
和蘭	三、一八八	一一八
埃及	七〇、五七五	二、八二三
「マウリチアス」	五六四、六二五	二二、五八五
英領印度	五二、三一五、六二〇	二、〇九二、六二五
「マラッカ」	九五、〇三三、〇七二	三、八〇一、三二三
「ピナン」	二〇、六二〇、二三七	八二四、八〇九
新嘉坡	八六、二〇七、八一五	三、四四八、三二三
暹羅	九、五〇二、五四五	三八〇、一〇二
「サイゴン」	二八五、三七五	一一、四一五
支那	七六、九七二、八三〇	三、〇七八、九二三
香港	二七、〇七四、〇〇五	一、〇八二、九六〇
日本	二三、二五三、一四五	九三〇、一二六

「サラワーク」

九五七、九五三

三八、三一八

「チモール」

七〇〇

一四八

濠洲

一八、七二六、六九七

七四八、六六八

「サムボール島」

七八、二三一、七三六

三、一二九、二六九

計

四八九、八一三、一一八

一九、五九二、五二五

即チ一萬「リートル」以上ノ輸出先ハ英領印度、海峽殖民地、支那、香港、日本及濠洲ナリトス、サムボール島ハ新嘉坡港外ノ一小島ニシテ此處ニ貯油場ヲ設ケ仕向先ノ狀況ニヨリ之ヨリ適宜輸送スルモノ、如シ最近五ケ年間ニ於ケル燈油ノ輸出高ヲ示セハ左表ノ如シ

一九〇五—一九〇六年

三六四、〇〇三、〇六一(リートル)

一九〇六—一九〇七年

四九七、一二一、八四四

一九〇七—一九〇八年

五一一、四一五、七六三

一九〇八—一九〇九年

五七六、五六三、七五九

一九〇九—一九一〇年

四三〇、九八六、一四四

重油ハ蘭領土内ニテハ「ローヤル、バケット」汽船會社(年三千噸ノ契約ナリト聞ク)其他ニテ多少ノ需用アル外ハ悉ク外國ニ輸出ス、其輸出先ノ主ナルモノハ新嘉坡、埃及、英領印度ニシテ千九百十年ニハ總計八千三百九十六萬二千「リートル」ニ達セリ、其價格ハ新嘉坡ニテ一噸ニ付三十五乃至四十五「シリング」ナリト云フ

「バラフィン」ハ「チュプー」及「バリババン」ニ於テ製造ス、本品ハ瓜哇島土人ノ更紗製造(Batik Process)ニ多量ニ使用スルヲ以テ「チュプー」製ハ悉ク之ニ充テ「バリババン」ヨリモ同島ニ輸出ス、外國ヘノ輸出ハ千九百十年「バリババン」ニ於ケル「バラフィン」工場ノ落成以來盛ントナリ同年ノ輸出高ハ七百三十三萬五千「キロ」(價額二百五十六萬七千餘盾)ニ上レリ、其輸出先ノ主ナルモノハ新嘉坡、日本ナリトス

此他「ベンジン」モ各製油場ニテ製造シ千九百十年ニ於ケル輸出高ハ總計三億一千餘萬「リートル」ニシテ價額千二百四十餘萬盾ニ達セリ
蘭領土内ノ石油産額ハ多量ニ上リ燈油ノ如キ其大部分ハ外國ニ輸出

販賣セリト雖モ、亦相應ニ米油ノ輸入セラル、ヲ見ル、是全ク商業上ノ競争ニ基ツクモノナリトス、千九百十年燈油ノ本領土内ニ輸入セラレタル高ハ左ノ如シ

瓜哇島

四二、五〇二、二〇〇「リートル」

二、一二五、一一〇盾

其他

一三、三二六、三三四

六六六、三一七

計

五五、八二八、五四四

二、七九一、四二七

六 燈油ノ價格

蘭領土ノ商業ノ中心タル「スラバヤ」市ニ於テ燈油ノ販賣價格(卸賣)ヲ見ルニ昨年十月頃ヨリ十二月マテハ漸次低落シ本年ニ入りテ恢復シ四月頃マテハ漸次騰貴セリ、其價格表ヲ左ニ示サン(盾)

米油	一九二一年	同	一九二二年	同	同	同
デ	十月	十二月	一月	二月	三月	四月
バ	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五
イ	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五
ル	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五
米油	一九二一年	同	一九二二年	同	同	同
デ	十月	十二月	一月	二月	三月	四月
バ	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五
イ	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五
ル	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五	三・五

旭印 三・二七五 三・二二五 三・二五三・二五 三・二五三・三〇 三・四三三・六〇 三・六五 米油ハ罐入

冠印 同右 同右 同右 同右 同右 同右 同右 蘭油ハ罐ナシ

蘭油龍印 三・〇七五 三・〇七五 三・〇七五 三・〇七五 三・二五三・四〇 三・五三三・七〇 三・七五

D.P.M.印 同右 三・〇二五 三・〇二五・三・〇五 三・〇五三・二〇 三・三五三・五〇 三・五五

鍵印 三・二七五 三・二二五 三・二五三・二五 三・二五三・三〇 三・四三三・六〇 三・六五

輸入税 百「リートル」ニ付 二十五仙

消費税 同 二盾五十仙

輸出先「ピナン」ニ於ケル米蘭兩油ノ價格ヲ示セハ左ノ如シ

四月(弗) 五月(弗)

米油

デウオス 一函ニ付 三・二二四 一罐ニ付 一・六四

矢印 同 二・八四 同 一・四四

龍印 同 三・〇〇 同 一・五二五

ランカアト樽詰 同 二・四五 同 一・二五

蘭油

ランカアト、ランブグラス印 同 三・二二〇 同 一・六二五

ランカアト鶏印 同 二・八五 同 一・四五

ランカァト冠印

同 二・八五

同 一・四五

ボルネオ十字印

同 二・七〇

同 一・三七五

七 製油場及輸送

蘭領土内ニ於ケル製油場ハ各産油地ニアリ、其所在地、製造力等左ノ如

シ

「ボルネオ」島「バリババン」

一 製造力一日約千三百噸、別ニ「バラフィン」蠟工場アリ

瓜哇島「ヲノクロモ」

一 不詳

同 「チユブー」

一 製造力一日約二百五十噸、別ニ「バラフィン」蠟工場アリ

同 「スマラン」

一 時々製油スルモノニテ小規模ノ工場ナリ

「スマトラ」島「ブラジュー」

二 内一ヶ所ハ廢止シ一ヶ所ハ製造力一日約一千噸

同「タンジョン、ブーラー」

一 一日ノ燈油製造高一萬二千罐(製造力四百噸内外)

同「バンカラン、ブランダン」

不詳

以上ノ内規模ノ最モ宏大ナルモノハ「バリババン」工場ニシテ約五千人ノ労働者ヲ使役セリ、之ニ次クラ「バンカラン、ブランダン」トス

此等ノ工場ニ於テ製造スル製品ハ瓜哇製ヲ除クノ外殆ント悉ク外國ニ輸出スルモノニシテ「シエル」會社ニ依リ產地ニ依リ直チニ仕向地ニ輸送スルモノアリ、或ハ新嘉坡港外ノ「サムボ」島貯油場ニ送ルモノアリ

八 油 質

原油ハ產地ニヨリ其性質ヲ異ニセリ、即チ「タラカン」産ハ重油ニ富ミ主トシテ燃料ニ供シ「サンガ、サンガ」産ハ多量ノ「バラフィン」ヲ含有シテ揮發油、燈油等ノ外「バラフィン」蠟ヲ製出ス、又瓜哇「スラバヤ」市ニ近キ油田ノ原油ハ土瀝青質ナレトモ同「プロラ」油田産ハ「バラフィン」ヲ含ミ稍良好ノ種ニ屬セリ、「スマトラ」産原油中「バレムバン」州ノモノハ揮發油及燈油分ニ富ミ「バラフィン」ヲ含有セス、又「ランカウト」以北ノモノハ多少「バラフィン」ヲ含有スレトモ之ヲ製造スルニ堪エスト云フ、今左ニ各地ノ油質ヲ對照セ

比重 揮發分 燈油分 殘滓

「ポルネオ」島「サンガ、サンガ」産 ○・八八六二 一八・五 五一・〇 二九・〇

瓜哇島「スラバヤ」産

〇・九七二

同 「レムバン」州産

〇・九二三

「スマトラ」島北部産

〇・八一

一四・八

六二・〇

二三・二

同 南部産

〇・七九二

四〇・〇

四八・〇

一一・〇

此等ハ書籍若クハ報告書ニ據リ蒐集シタルモノナレハ敢テ製油ノ實況ヲ示スモノニアラサレトモ亦油質ノ一斑ヲ知ルニ足ラン

九 鑛區所有權及税金

蘭領印度總督府ハ千九百六年鑛業條例ヲ改正發布セリ、之ニ依レハ蘭領土ニ於テ鑛山ノ試掘權若クハ採掘權ヲ得ントスルモノハ和蘭人、蘭領印度住民、蘭本國若クハ蘭領印度ニ於テ設立セラレタル商社會社ニ限ラレ、商社會社ナルトキハ其重役ノ過半數ハ和蘭人又ハ蘭領印度ノ住民ナルヲ要ス、而シテ試掘出願ハ其監督官廳ニ於テ三ケ年ヲ限リ許可スルモノニシテ二回マテハ一年ヲ限リ之カ延期ヲ許可スルヲ以テ其權利ハ結局五ケ年間有效ナリトス、試掘ハ許可ノ日ヨリ一年以内ニ

著手スル規定ニシテ之ヲ實行セサルトキハ其權利ヲ剝奪セラル、借區ハ鑛物ノ存在ヲ確認セルモノニ限り總督之ヲ許可シ其期限ハ七十五年以内トス

税金ハ試掘地ニ於テハ每一「ヘクタール」ニ付二・五仙、借區地ニ於テハ每一「ヘクタール」ニ付二十五仙ノ割ヲ以テ前納セシメ、且ツ鑛物ノ賣上高ニ對シ其百分ノ四ノ鑛産稅ヲ徵收スルモノトス

第二章 油 田

一 「ボルネオ」島、サンガ、サンガ「油田」

位置 「ボルネオ」島ノ東海岸ニハ所々ニ石油産地アリト雖モ目下最モ盛ンニ稼行スルハ「サンガ、サンガ」油田 *Bunga Bunga* ナリトス、本油田ハ「コーテイ」河口ヨリ約十六哩上流ニ當リ西方ヨリ流レ來レル一支流「サンガ、サンガ」川ノ沿岸ニアリテ北東ヨリ南西ニ延互スル一大採油地ナリ、「サンガ、サンガ」川ヲ溯ルコト三哩餘ニシテ「サンガ、サンガ、ダラム」ト稱スル一小村落アリ、全ク石油業ノ爲メニ成立シタル一部落ニシテ戸數約二

百、本邦人三浦得松ノ雜貨商店アリ、此地ト「サマリンドン」市 Samarinda 間ニハ支那人ノ所有セル小蒸氣船アリテ毎日一回往復セリ

地形 油田地方ハ海拔僅カニ二三百尺ヲ超エサル丘陵地ニシテ一般ニ臺地性ヲ帶フ、山地ハ未タ斧鉞ヲ加ヘサル鬱林ニシテ徒ニ群猿ノ栖息スル所トナリ河畔ニハ稍廣キ平地存スルモ多クハ蘆葦ノ繁茂セル濕地ニシテ瘴癘ノ氣鬱生シ又鱷魚ノ潜伏スル所タリ、「コーテイ」河ハ其幅千米餘ニシテ「サマリンドン」市ニ至ルマテ三四千噸ノ大船自由ニ航行スルコトヲ得、「サンガ、サンガ」川ハ幅數十米乃至百米ニシテ吃水十四五呎ノ船舶ヲ入ル、ニ足リ工場沿岸ニハ所々ニ木道棧橋ヲ設ケテ船ノ繫泊ニ便ニス

地質 ハ第三紀ノ漸新期及中新期ニ屬スル頁岩、砂岩ノ互層ヨリ成リ屢々石炭層ヲ挾有セリ、「コーテイ、ラマ」ヨリ「サンガ、サンガ」川ノ右岸ニ沿ヒテ略北々東ヨリ南々西ニ走レル一大背斜軸アリ、其延長二十哩内外ニ互リ所々ニ「ドーム」構造ヲ形成スル所アリテ石油ハ之ト密接ナル關

係ヲ有ス、而シテ背斜層ノ西翼ハ急斜シ東翼ハ緩斜セリト云フ、「サマリ



第一圖
島ガネルボ
田油ガンサガンサ
圖略近附
一之分萬十六尺縮



採油地
背斜軸

ンダ」地方ニハ此他
尙二三ノ背斜軸ア
リテ多少石油ノ痕
跡存在スト雖モ未
タ開發セラル、ニ
至ラス

沿革 本油田ノ濫
觴ヲ尋ヌルニ和蘭
人「オットー、メンタン」
ナル人アリテ十數
年前「サマリ」ニ
來リ其上流地方ニ

於ケル石炭探掘ヲ企圖セシモ悉ク失敗ニ歸セリ、其後氏ハ「サンガ、サン

ガ「流域ニ石油露面ノ顯著ナルモノヲ認メテ歸國シ大ニ其地方ニ於ケル石油事業ノ有望ナルコトヲ説キシト雖モ、氏ノ失敗ニ鑑ミ殆ント之ニ耳ヲ傾クルモノナカリシカハ氏ハ去テ英國ニ赴キ「サミューエル」ニ説キテ其入ル、所トナレリ、千八百九十七年「サミューエル」ハ蘭領印度商工業會社「Nederland Indes Industrie en Handels Mij.」ヲ組織シ「サマリンダ」ニ事務所ヲ設ケテ此地方ノ石油事業ヲ經營スルニ至レリ、然レトモ鑛區ハ尙「メンタン」ノ所有トシ之ニ産油一噸ニ付二十五仙ノ歩合ヲ仕拂ヒ、又此地方ハ總テ「コーテイ」王ノ領土ナルヲ以テ之ニ一噸ニ付五十仙ヲ納メ、別ニ政府ニモ一噸ニ付二十五仙ノ税金ヲ納入セリ、斯クテ事業ハ年ヲ追フテ發展シ産油モ次第ニ増進シ遂ニ大ニ石油界ニ於テ注目セララル、ニ至レリ、當時又「フアン、デ、ボア」ナル人アリテ「コーテイ、ラマ」ニ一鑛區ヲ有シ探掘ニ着手シタリシニ後「ローヤルダッチ」石油會社之ヲ買收經營シタレトモ微々トシテ振ハス常ニ「サミューエル」派ノ嘲笑ヲ買ヒタリ、然ルニ千九百七年「ローヤルダッチ」石油會社ハ蘭領石油業ノ統一ヲ計リ「サミュー

エルト合併シテ採油、製油等ノ事業ヲ經營シ之カ擴張ニ努メシカハ爾來本地方ノ石油業ハ冲天ノ勢ヲ以テ發展セリ、而シテ其合併ノ際ニハ「サミューエル」ノ會社ニ屬スル社員ニハ相當ノ手當ヲ給シ悉ク解雇シ事業上欲クヘカラサル人物ハ更ニ之ヲ雇入レタルカ如キ斷然タル處置ニ出テタリト云フ、斯クテ鑛區ハ現今「バターフシュー」石油會社ノ有二歸スルモノ、如ク「コーテイ」王ニ納メ來リシ一噸五十仙ノ税金ハ昨年来或口實ノ下ニ一切之ヲ中止セリト云フ

坑場　ハ「サンガ、サンガ、ムアラ」、「ルイゼ」、第一、第二、第三及第四ノ六區ニ分タルト雖モ相連續スル一油帶ニ屬シ約三町ノ幅ヲ以テ北々東ヨリ南々西ニ走リ其延長約二里餘ニ互レリ、各坑區ニハ主任一名其他鑿井技師アリ、又坑場總支配人一名アリテ土人ハ之ヲ「トアン、ブッサアル」ト呼フ、蓋シ「大旦那」ノ義ナリ、主任ハ支配人ノ指揮ヲ受ケ坑區ノ監督、機械、器具ノ受渡ニ任シ、鑿井技師ハ會社ノ命スル所ニ從ヒ油井ノ掘鑿ヲ擔當セリ、該技師ハ「サミューエル」ノ經營セル頃ニハ總テ米國人ナリシモ今ヤ和

蘭人ヲ以テ之ニ代ヘ僅カニ一二名ノ米人ヲ殘スノミ、坑區主任トシテ小川某ト稱スル本邦人一名アリ、十數年前當地方ニ移住セルモノニシテ坑區中最大ナル第三區ヲ擔當シ大ニ支配人ノ信用ヲ受ケツ、アリト云フ

油井及油量 油井ハ「ムアラ」及「ルイゼ」兩區ヲ合シテ約三十坑ヲ算シ其他最大坑區タル第三區ニハ六十五坑ヲ開掘セリト云フ、之ヲ以テ推考スルニ油田ヲ通シテ總計二百五十坑内外アルヘシ

油井ハ規則正シク數十米乃至百米内外ノ距離ヲ保チ悉ク索網鑿法ヲ以テ穿掘セルモノニシテ、櫓ハ此附近ノ山林ニ産スル「カユブシ」(鐵樹)ト稱スル堅固ノ材木ニテ工作シ一個六百盾ノ受負ナリ、又噴油ノ損耗ヲ防カンカ爲メニ「アタツ」ト稱スル茅ニ似タル草ヲ以テ作レル苦(千枚ノ價格十二盾半)

ニテ櫓全部ヲ被フ、原動力ハ蒸氣ニシテ燃料ニハ數年前マテハ殆ント瓦斯ノミヲ用キシモ近年大ニ減退シ瓦斯及原油ヲ併用セリ、然レトモ夜間ニ至レハ尙四吋乃至六吋鐵管ニテ導ケル多量ノ瓦斯ヲ社宅及坑

場内所々ニ點火シ濫費セルヲ見ル

本油田ニテハ當時一晝夜ニ七八十噸ヲ出油スルモノヲ良井トシ四五
十噸ノ所産アルモノヲ普通トス、多クノ油井ハ掘止當時噴油シ一週間
許ニテ止ミ約半年ヲ經テ半減スト云フ、本官ノ巡回當時本邦人小川ノ
擔任坑區ニテ成功セル油井ハ午後六時ヨリ午前五時マテ十一時間ニ
三十噸ヲ噴油シ良井ニ屬ス、又嘗テ「ルイゼ」坑區ニ於ケル一井ハ一晝夜
ノ出油量千二百噸内外ヲ見タルモノアリト云フモ此ノ如キハ殆ント
異例トセリ

油井ノ深度ハ隨所相異リ第三坑區ニテハ淺キハ二百六十尺、深キハ二
千尺内外ナリ、坑場中時ニ四千尺ノ深層ニ達スルモノアレトモ此等ハ
凡テ試掘井ニ屬シ少數ニ過キス
總出油量ニ就テ考フルニ第三坑區ハ井數六十五ニシテ一日四百噸ノ
所産アリト云フヲ以テ見レハ平均一坑六噸内外ノ割合ナリ、今坑場ノ
油井總數ヲ二百五十トスレハ其產出高ハ約千五百噸ニ當レリ、然レト

モ當時尙ルイゼ「坑區ニ於テ千噸以上(稍過大?)ヲ産スル油井アルヲ以テ本油田ノ一日ノ總産出高ハ二千噸乃至二千五百噸ト思惟セハ大差ナカルヘシ」(因ニ記ス三浦商店主ハ一ヶ月ノ總産出高三四萬噸ナリト云ヒ、石油會社技師クレイン氏ハ一日ノ總産出高二千噸ナリト語レリ)

本油田ノ産出高ハ前述ノ如ク多量ニシテ然モ五六噸以上ノ所産アレハ收支相償フト云フ、然レトモ「バリババン」ニ於ケル製油場ノ製造力ハ一日約千三百噸ナレハ當時産出ノ少量ナル油井ハ廢止シ又多量ノ産出アルモノモ其儘閉塞セルモノアリト云フ、而シテ尙過多ノ分ハ溪間ヲ堰塞セル二個ノ大貯油池アリテ之ニ貯蓄シ一個ハ大約二十三萬噸、他ハ十萬噸ヲ入ルヘシト云フ、本油田ハ斯クノ如ク生産過多ノ狀況ヲ呈スレトモ會社ハ尙絶エス地質學者ニ多數ノ人夫ヲ附シ諸方ニ派出シ油田ノ調査ト試掘ニ怠ラサルトハ深ク感スル所ナリ

採油ハ多ク普通ノ汲上ケ唧筒法ニ據ルモ屢々壓搾空氣(百封ノ壓力ナリト云フ)ヲ井内ニ送リテ採油スルモノアリ、然レトモ後法ハ多量ノ出油井ニノミ應用スト云フ

原油ハ坑區ニヨリテ其質ヲ異ニシ從テ左記ノ如ク種々ノ價格アリ、
「ラフィン」油ハ主ニ「ルイゼ」坑區ヨリ產出シ最モ高價ノ種ニ屬ス

第一種 一噸ニ付 大約五十盾

第二種 同 大約二十盾

第三種 同 大約十二盾

第四種 同 大約六盾五十仙

送油 原油ハ坑場ヨリ三吋半乃至五吋鐵管ニテ先ツ「サンガ、サンガ、ダ
ラム」ノ下流數町ノ處ニ建設セル貯油場ニ送リ此處ニハ五千噸入五個、
二千噸入一個、其他二個ノ「タンク」ヲ設備セリ、從前ハ之ヨリ直チニ「タン
ク」船ニ移シ輸送シタレトモ現今ハ「コーテイ」河畔ニ位スル「スング、モリ
アン」ニ五千噸入ノ「タンク」七個ヲ据エテ貯油場トナシ「サンガ、サンガ」ヨ
リ電氣動力ニヨリ之ニ流送貯蓄ス、而シテ該「タンク」ヨリ河岸ノ棧橋ニ
繫泊セル「タンク」船ニ移シ以テ「バリ」パン「ニ運送スルモノナリ、
タンク」船ハ三千噸内外ノモノ四隻アリ、曳船ヲ附シ航行スルモノニシテ各一

ケ月ニ約五回輸送スト云フ、若シ果シテ然ラハ一ヶ月約五六萬噸ノ原油ヲ本油田ヨリ「バリババン」製油場ニ送ルヘキ割合ナリ、然レトモ會社ハ斯ル緩慢ナル輸送力ニ満足セス、目下本油田ヨリ「バリババン」ニ至ル四十五哩間ニ六吋鐵管布設中ニテ既ニ「バリババン」及「サンボヂヤ」間ハ完成シ「サンボヂヤ」及「サンガ、サンガ」間モ亦近ク成ラントス、之カ竣功ノ曉ハ輸送力更ニ増加スヘク製油場モ亦漸次擴張シツ、アレハ近キ將來ニ於テ「ボルネオ」油ノ市場ニ於ケル勢力ノ著大ナルヘキコト疑フ可カラス

職員、職工、役夫 職員ト稱スルハ悉ク白人ニシテ五十名内外アリ、何レモ社宅ニ住居ス、職員中技術ヲ司トル所謂技師ナルモノハ月給三百乃至六百五十盾ニシテ其下ニ技師補ト稱スヘキモノアリ、月給百五十乃至三百盾トス、職員ニハ總テ一年一回一ヶ月間ノ休暇ヲ與ヘ「ボルネオ」ヨリ「ストラバヤ」ニ至ル旅費及手當ヲ給ス

職工及役夫ハ合シテ約千五百人ヲ使用ス、職工ハ殆ント悉ク支那人ニ

シテ一日一盾半乃至三盾半ノ給料トス、職工中本邦人數名アリテ月給五十盾乃至八十盾ヲ與ヘタル、役夫即チ「苦力」ハ悉ク契約勞働者ニシテ瓜哇人及支那人ナリトス、一日四十仙ヲ給セラレ合宿所ニ住居ス、就業時間ハ午前七時ヨリ午後五時半マテニシテ正午ヨリ午後一時半マテヲ休息時トス、日曜日ハ休業シ若シ就業スルコトアレハ其給料ハ午後二時マテヲ一日分トシ、五時マテ就業セハ二日分ヲ給ス、又夜業ハ午後十二時マテヲ一日分、午前三時マテヲ二日分、午前六時マテヲ三日分トスルノ規定ナリ

交通 前ニ述ヘタルカ如ク「サマリンダ」及「サンガ、サンガ、ダラム」間ニハ支那人ノ所有ニ係ル小蒸氣船アリテ毎日一回往復シ途中坑場所在地及各村落ニ寄航シ郵便物荷物ヲ運搬セリ、其他石油會社ニモ二三ノ小蒸氣船アリテ屢々坑場、病院、貯油場等ヲ往來スルヲ目撃ス

坑場ヨリ病院、貯油場、「サマリンダ」及「バリババン」ニ至ル間ハ電話ヲ設置シ又油田ト「バリババン」トノ間、ハ「タンク」船ヲ利用シ郵便物、荷物等ノ運

搬ヲナス、而シテ「サマリンド」及「バリババン」ニハ各地ニ通スル公衆電報アリ、其他此等ノ地方ヨリ新嘉坡及瓜哇、スラバヤ「ニハ二週若クハ一週一回」ローヤルバケット「會社」ノ汽船往復シテ交通機關ハ相當ニ整備セリ衛生状態 職工及役夫ハ一般ニ過役ト營養不良トニ基ツキ病氣ニ犯サル、モノ多シ、特ニ創業ノ際ハ何レノ地ニアリテモ深林濕地ニ進入シ就業スルヲ以テ病者甚タ多數ナリト云フ、故ニ坑場附屬ノ病院ハ「コーテイ」河畔ニ其位置ヲ占メ斯カル僻遠ノ地方ニ見ルヘカラサル宏麗ノ建築物ナリ、聞ク所ニ依レハ入院患者ハ最初二週間ハ施料ニシテ其以後ハ入院料ヲ支拂フノ規定ナリト云フ

坑場ノ飲料水ハ總テ蒸餾水ヲ用キ使用水ハ河水ヲ唧筒ニテ汲上ケ鐵管ヲ以テ各所ニ分配ス

建築物 本油田ノ事務所ハ「サンガ、サンガ、ダラム」ニアリテ其附近ニハ社宅、倉庫、役夫納屋九棟（一棟大約百人ヲ入ルヘシ）、機械工場及發電所等アリ、何レモ粗造ナル木造家屋ニシテ屋根ハ一般ニ「トタン」板ヲ以テ葺

キ又時ニ「アタップ」ノ苦ヲ用キシモノアリ、其他各坑區ニモ亦一二軒ノ社宅ト簡單ナル機械工場アリ、之ヲ要スルニ總テ社宅事務所等ハ油田ノ盛大ナルニ拘ラス頗ル粗造ノモノニシテ且職員ノ如キモ比較的少數ナルノ感アリ

氣候　ハ他ノ蘭領土ト同様雨季及乾季ニ分レ十二月頃ヨリ二三月頃ニ至ルマテヲ雨季トス、然レトモ此地方ニテハ唯雨多シト云フノミニテ絶エス降雨スルニアラス、溫度ハ本官巡回當時即チ三月ニハ室内ニテ朝夕七十六度乃至八十度(華氏)ニシテ日中ハ八十四五度ニ上リ比較的溫和ナリ、然レトモ乾季ニ入レハ溫度次第ニ増進シ屢々酷熱堪エ難キコトアリト云フ、一般ニ熱帶地方トシテハ惡疫ノ流行少ナク健康地ニ屬スル部分ナリトス

二 「ボルネオ」島ニ於ケル其他ノ油田

「サンガ、サンガ」油田附近ニハ他ニモ所々ニ石油產地アリテ或ハ當時試掘中ノ處アリ、或ハ試掘ヲ廢止セル處アリ、其主ナルモノヲ舉クレハ次

ノ如シ

「スング、モリアン」及「コーテイ、ラマ」ニ嘗テ數坑ノ油井ヲ試掘シ多少出油セシモ當時中止セリ

「アングナ」詳カナラス

「スング、テイラン」詳カナラス

「ボララン」「サマリング」及「サンガサンガ」間ノ「コーテイ」河畔ニ位スル本地ヨリ約二時間行程ノ處ニ一試掘地アリ、五坑ノ油井ヲ開掘シ多少出油シタレトモ中止シ巡回當時ハ既ニ鐵管引上ニ着手セリ

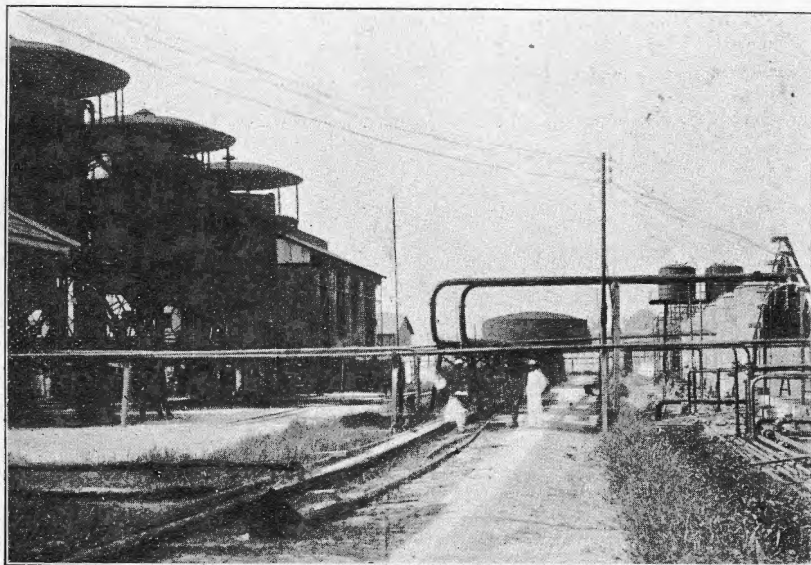
「サンボヂヤ」ハ「サンガ、サンガ」油田ノ南西約十六哩ノ處ニ位シ數坑ノ出油井アリ、恐ラク「サンガ、サンガ」油田ヲ通スル背斜軸ノ此地ニ連續スルモノナラン

此他「ボルネオ」東海岸ニテ目下採油ニ従事スルハ「タラカン」島ノ油田ナリ、海岸ヲ距ルコト一里許ノ所ニ位シ一日約三百噸ノ所産アリト云フ、原油ハ比重大ニ主トシテ燃料ニ適ス、「サングー」ラン「灣」ノ南角ニ位ス

ル「ミアン」島ハ試掘地ニシテ近時日産二百噸内外ノ油井ヲ成功セルニ
ヨリ會社ハ今ヤ大ニ力ヲ此方面ニ盡シ千人内外ノ人夫ヲ送り道路ノ
開鑿等ニ著手セリ、而シテ此地ハ飲料水ニ乏シキヲ以テ目下「サマリ
ン」ダヨリ汽船ニテ輸送シツ、アリト云フ、此航路約十餘時間ヲ要ス

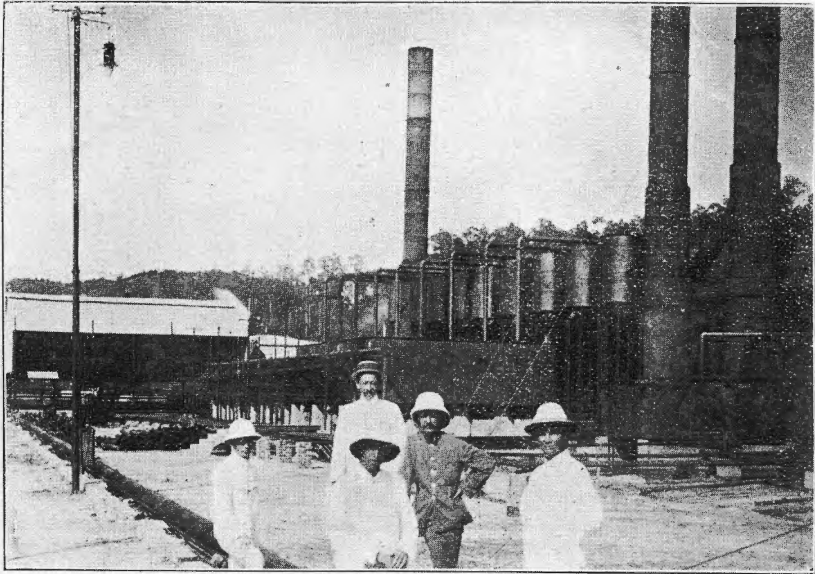
二 「バリ」パパン「製油工場」

「バリ」パパン「ハ」ボルネオ「島」東海岸ニ於ケル唯一ノ港灣ナリ、元來此地ハ
百米内外ノ丘陵地帯ニシテ丘阜直チニ海ニ臨ミ灣内水深ク海岸ニ接
シ大船巨舶ヲ繫泊スルコトヲ得ルヲ以テ特ニ此地ヲトシ製油工場ヲ
設置セルモノナラン、工場ハ初メ蘭領印度商工業會社ノ建設ニ係リ後
「パターフシエ」石油會社ノ有ニ歸シテヨリ大ニ之ヲ擴張セリ、即チ山ヲ
削リ平地ヲ埋メテ從來工場内ニ存立シタル土人ノ部落ハ東南約一里
ナル「ケランダサン」ト稱スル所ニ悉ク之ヲ移住セシメ、該地及工場間ハ
海岸ニ沿ヒテ道路ヲ開キ土地ヲ區劃シ數多ノ社宅、納屋等ヲ建築シ社
長并ニ地方官等皆其内ニ住居セリ、道路ノ如キハ十餘間幅ニシテ完全



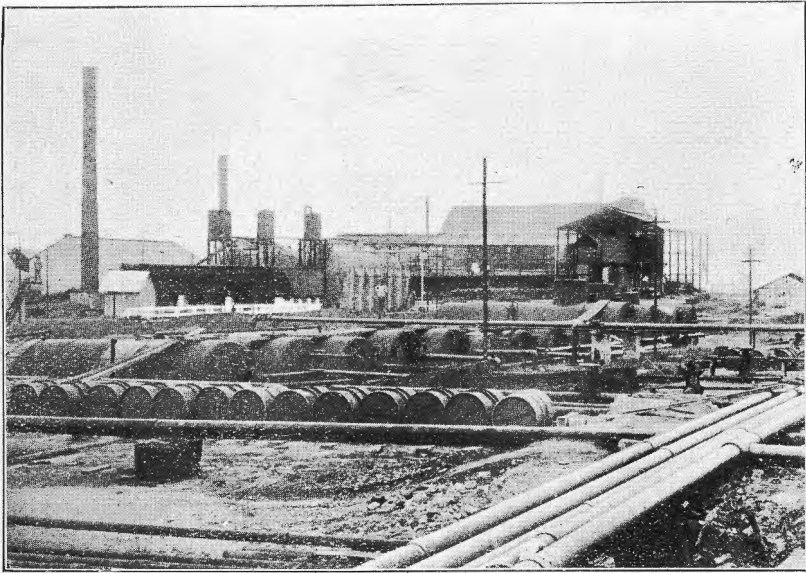
ニ築造シ兩側ニハ樹木ヲ植付ケ實
 ニ歐米諸國ノ新市街地ニ於ケルト
 異ナル所ナシ、而シテ工場ヨリケラ
 ンダサン「ニ至ル距離ハ約三四哩ニ
 達ス、工場ハ背後ニ山ヲ負ヒ沿岸ニ
 ハ數條ノ木道棧橋ヲ建設シテ總テ
 船舶ヲ之ニ繫泊セシメ工場内ニハ
 軌條ヲ敷キ以テ海陸運搬ノ連絡ニ
 便セリ、又「ケランダサン」ノ東方約一
 哩ノ處ニ無線電信所ヲ設ケテ遙カ
 ニ「タラカン」島ト音信ヲ通ス
 以上ハ總テ會社ニ隸屬シ又會社ノ
 建設セル所ニシテ其他政府ノ所管
 ニ屬スル「コントローラ」(地方官)、税關

部一ノ場油製シババリバ



郵便電信局等アレトモ何レモ會社
ノ地内ニアリテ其餘澤ヲ蒙レルモ
ノ、如シ
「バリババン」ニハ最初油井ヲ開掘シ
中ニハ出油セルモアリテ今尙三四
ノ井櫓存スト雖モ全ク廢井ニ歸セ
リ、工場内ニハ製油場、「バラフィン」蠟及
蠟燭製造場、製罐場、發電所、硫酸製造
場、製材場等ノ諸工場アリテ其他事
務所、倉庫、納屋、社宅等アリ
製油場ハ工場ノ東部ニ位シ十數基
ノ精製蒸餾釜並立シ別ニ建造中ノ
モノ五基ヲ目撃セリ、製油法ハContinu-
ous Distillation Systemニ屬シ一晝夜ノ製

場造製酸硫及部一ノ場油製シパアリバ



造力千三百噸内外ナリト云フ、原油
 「ダシク」ハ所々ニ散在シ其數四十餘
 ヲ算ス、何レモ容量二三千噸ヨリ五
 千噸内外ノモノナリ
 「バラフィン」蠟製造場ハ工場ノ西部ニ
 位ス、千九百十年ノ初期ニ完成セル
 モノニシテ、目下一ヶ月ノ製造高ハ
 千二百噸内外ナリト云ヒ、當港渡一
 噸ノ價格三百四十盾ナリト云フ、又
 蠟燭ノ製造高ハ一日一萬本ナリト
 聞ケリ
 工場ノ動力ハ兩三年前マテハ總テ
 蒸氣ヲ用キシモ當時電力ニ改メニ
 千「ヴォルト」ノ發電機ヲ据付ケタリ、燃



料ニハ重油ヲ使用ス
工場ノ給水ハ「ケランダサン」ノ東方
ヨリ數哩ノ間十二吋鐵管ヲ布設シ
テ溪水ヲ導ケリ、工場ハ事務員及技
術者ヲ合セ白人ハ二百五十名内外
ニシテ、労働者ハ支那人土人合シテ
約五千人ナリト云フ、而シテ會社ハ
労働者ノ爲メ毎土曜日ニ活動寫眞
或ハ演劇ヲ催シテ之ヲ慰安ス
當工場ニ於ケル製品ハ場内ニ敷設
セル輕便軌條ニヨリ機關車ニテ引
キ棧橋ニ運搬シ之ニ繫泊セル汽船
ニ移シ以テ仕向地ニ輸送ス

四 瓜哇島東部ノ油田



瓜哇島ノ東部ニ於テハ「スラバヤ」州、
 「レムバン」州及「スマラン」州等ノ所々
 ニ油田地アリ、然レトモ此地方ハ石
 油會社ノ警戒特ニ嚴密ニシテ會社
 以外ノ人ハ出入ヲ嚴禁スルヲ以テ
 殆ント其狀況ヲ知ルコト能ハス、余
 ノ瞥見セルハ「レムバン」州「プロラ」郡
 油田ノ一部分ト「スラバヤ」市ニ近キ
 油田ノ一局部トニ過キス

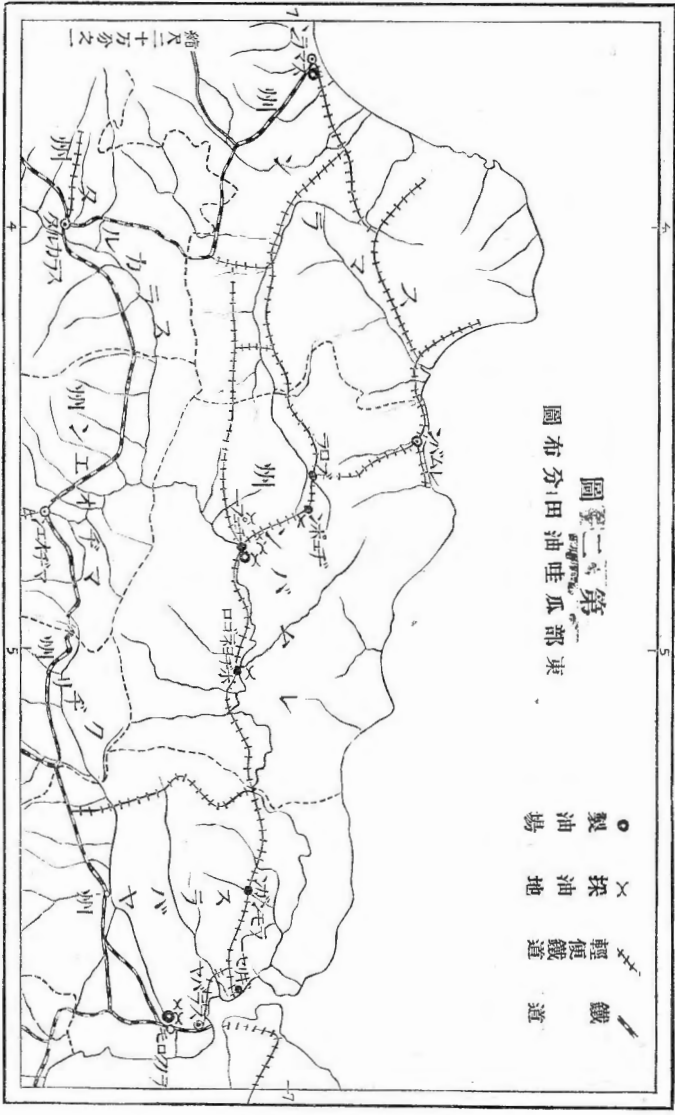
甲 「プロラ」油田

「レムバン」州ノ首都「プロラ」市 Blora ト
 「チ「ブー」」Tjipoe トノ間ニ略東西ニ連
 互シ高距二三百米ノ臺地性山脈ノ
 横ハレルモノアリ、該山脈中ヲノサ

リ、「チナヨン」、「ケデワシ」、「レドク」、「スマンギイ」、「ケヂンヂン」等ノ採油地アリテ恰モ我東山油田ニ於ケルカ如ク散在シ其總延長約十五哩ニ互レリ、其他「ブアラ」市ニ近ク「ヂュボン」採油地アリ、又「チュプー」ノ東方「ボヂョノゴロ」地方ニモ採油地アリ、就中最モ盛ナルハ「ケデワシ」ニシテ之ニ次ク「レドク」、「トシ」ケヂンヂン「ヲ以テ第三トス、本官ノ一見シタルハ「ヲノサリ」及「レドク」ニシテ然モ「チーク」樹林ノ參觀ヲ裝フテ漸ク其一部ヲ見タルノミ

「ヲノサリ」採油地「チュプー」ノ東北東大約八哩ニ當リ「チナヨン」ト稱スル一村アリ、「チュプー」ヨリ二頭立馬車ニテ一時間半ニシテ達ス、此間ハ平地若クハ階段地ニシテ該部落ハ「ブアラ」山脈ノ南麓ニ位シ之ヨリ溪流ヲ辿リ上ルコト約十町ニシテ採油地アリ、事務所、發電所、「タンク」等アリ、之ヨリ以上ハ入場ヲ許サス、此地ニ先年マテハ九坑アリシモ山崩レノ爲メ埋没シ現今五坑殘存セリ、其深サ三百二十五米内外ニシテ一坑ノ出油量ハ一晝夜僅カニ三噸内外ニ過キスト云フ、油井ヨリ二吋鐵管ニテ

第一圖 東部哇油田分布圖



「タンク」ニ導キ之ヨリ三吋鐵管一條、二吋鐵管二條ヲ布設シ電力唧筒ニヨリ「チュブ」製油場ニ送油ス、地質ハ砂質石灰岩ノ大ニ發達セルヲ認ムルノ外層向傾斜等詳カナラス

「レドク」採油地「チュブ」ヨリ「プロラ」街道ヲ北々西ニ行クコト約四哩ニシテ右ニ折レ更ニ二哩ニシテ「レドク」部落ニ達ス、採油地ハ其北方山地ニアリ、地質ハ主ニ砂質石灰岩及石灰岩ヨリ成リ層向東西ニ走リ一條ノ背斜ヲ形成シ其南翼ハ五六十度ニ傾斜スレトモ北翼ハ緩斜セリ、油井ハ「チーク」樹林中ニアリテ總計百餘ヲ算スヘシト云フ、本官ノ見タルハ其一部分ニシテ三井アリ、何レモ壓搾空氣採油法ニヨリ汲取レルカ如シ、油量及深サ等ニ就テハ番人ニ糺スモ更ニ要領ヲ得ス、本油田ハ三吋鐵管一條、二吋鐵管二條ヲ以テ「チュブ」製油場ニ連絡セリ

聞ク所ニヨレハ「ケデワ」採油地「チュブ」ノ北方約七八哩ニハ百餘坑アリテ一日三百噸ヲ産ス、而シテ本地方即チ「プロラ」油田ニ於ケル總産額ハ一日約六百噸ニ達スト云フ、何レノ採油地モ二吋乃至三吋鐵管ヲ布

設シテ「チュブー」ト連絡セリ、又各坑場間ニハ電話ノ設備アリ
 近時米國「スタンダード」會社ハ「Hollandische American Mij.」ナル會社ヲ設立シ其
 名目ノ下ニ「バターフシユ」石油會社鑛區ノ外部ヲ占領シ既ニ「チュブー」ニ
 事務所ヲ設ケ鐵管諸機械ヲ輸送シ將ニ事業ニ著手セントセリ

乙 「チュブー」製油工場

本工場ハ「プロラ」油田全部ノ原油ヲ集中シ精製スル所ニシテ「チュブー」市
 街地外ノ「ガーレン」ニアリテ「ソロ」河畔ニ建設セラル、工場ハ大體ニ於テ
 製油場ト「バラフィン」蠟製造場トニ分レ製油場ニハ二十噸入二基、十噸入
 十基ノ精製蒸餾釜アリテ揮發油及燈油ヲ製出シ、其殘リハ「バラフィン」蠟
 製造場ニ送リテ更ニ蒸餾シ「バラフィン」油トナシ之ヲ冷室ニ導キ凝固セ
 シメ水平及垂直壓搾機ニ掛ケ重油ヲ搾出シ以テ「バラフィン」蠟ヲ製出ス、
 其他機械油ヲモ製造セリ
 本製油工場ニ附屬セル原油「タンク」ハ工場外ノ田畝中ニ二百五十萬リ
 ートル「入五個、五十萬」リートル「入一個」ヲ設置シ工場ト二吋乃至四吋鐵

管ニテ連結セリ、聞ク所ニヨレハ本工場ノ精製蒸餾釜ハ一晝夜ニ二回
原油ヲ入レ換エ作業スルモノニシテ其製造力ハ一晝夜二百四十噸乃
至二百八十噸ナリト云フ

工場ニハ白人約七十名、支那人及土人ノ労働者合シテ千五百人内外ア
リテ晝夜交代シテ就業ス

本工場ニテ製出スル燈油ハ冠印及鍵印ニシテ總テ瓜哇内地ニ販賣シ、
燈油ハ二萬九千五百「キロ」入ノ「タンク」車ニテ、揮發油ハ大約四分ノ一噸
入位ノ鐵製ノ樽ニ入レテ輸送ス、又「バラフィン」蠟ハ内地土人ノ「パチック」、更
紗製造ノ際蠟ヲ用キテ紋ヲ描ク用ニ供ス、然レトモ實用上少シク軟ニ
過クルヲ以テ米國製「バラフィン」蠟ヲ混シ使用スト云フ、其他重油ハ「タン
ク」車ニテ「スラバヤ」市ニ近キ「グリセ」ノ大「タンク」ニ送り之ヨリ諸方ニ輸
出ス

丙 「ヲ」ノクロモ「油田

「スラバヤ」市ノ南方約四哩餘ニ當リ河畔ニ「ヲ」ノクロモト稱スル一村ア

リ、此處ニ一製油場ヲ設立シ、其對岸「グノンサリ」ヨリ「リダー」ヲ過キ「マデ」
「部落」ニ至ルマテ約六哩ノ間ニ互リ採油地アリ、之ヲ總括シテ「ヲノク
ロモ」油田 Wānākrama Oil Field ト稱ス、此地方ハ高サ數十米ニ充タサル岡陵地
ニシテ地質ハ石灰質岩ヨリ構成セラレ、カ如シト雖モ著シク霏爛シ
テ土壤化シ露頭少キヲ以テ岩質及其層向傾斜等ヲ知ルコト能ハス
油井ハ悉ク岡陵地ノ南麓ニアリテ殆ント東西ニ走り數哩ノ間連續セ
リ、坑場ハ「グノンサリ」、「リダー」、「カリサントリ」、「チルク」等ノ數個所ニ分
レ各白人ノ主任アリ、就中當時最モ盛ナルハ「リダー」坑區ナリトス、油
井數ハ全油田ヲ通シテ百數十坑ナルヘク其多クハ已ニ櫓ヲ取毀チ只
採油スルノミニテ掘鑿中ノモノハ甚タ稀ナルカ如シ、採油法ハ多クノ
油井ヲ連結シ同一動力ヲ用フルモノニシテ「グノンサリ」ニテハ約三十
ノ油井ヲ悉ク一動力ニテ採油スルヲ目撃セリ、出油量ハ詳カナラサレ
トモ「グノンサリ」方面ノ油井ニ就テ見ルニ一日二石以上ニ上ラサルヘ
ク多量ノ水ヲ混ス、故ニ油田全部トシテハ一日約五六十噸ノ油量ナル

ヘシト推察セラル、原油ハ土瀝青質ニシテ比重大ニ粘質強ク露面若クハ油井ノ周圍ニ溢出シタルモノハ屢々固結シテ土瀝青ニ變セリ
本油田ハ元「グ」ノンサリ「山」上ニ原油ノ露面及瓦斯ノ發生スル附近ニ掘下セシニ始マリ漸次西方ニ移リシモノニシテ油井ハ殆ント一線上ニ東西ニ排列セリ、是レ蓋シ東西ニ走レル一條ノ背斜軸ノ存在スルモノナラン、而シテ今ヤ將ニ「グ」ノンサリ「方」面ノ油井ハ殆ント涸渴セントスルノ状態ニアリ
本油田ノ東部ハ用水ニ乏シキカ故ニ「グ」ノンサリ「河」畔ニ唧筒「ステ」ーシヨ「ン」ヲ設ケ之ニヨリテ給水ス、原油ハ三吋鐵管一條、二吋鐵管二條ヲ布設シテ流送シ目下尙一條ノ三吋鐵管布設ニ從事セリ
「フ」ノクロモ「製」油場ハ外部ヨリ之ヲ觀ルニ精製蒸餾釜數基、「ア」ヂテー「タ」ー「三」萬「リ」ートル「入」五個、原油「タン」ク五十萬「リ」ートル「入」六個別ニ其約二倍ノ容量ヲ有スルモノ二個ヲ設備セリ、全體トシテ規模小ニ且ツ舊式ニ屬スルモノ、如シ、製品ハ「タン」ク「車」(二萬九千五百「キ」ロ「入」)ニテ輸送ス、

又本製油場ニテハ土瀝青ヲ製造シ「スラバヤ」市ノ道路用ニ供ス、然レトモ其用法ノ完全ナラサルカ又ハ氣候ノ然ラシムルニヤ土瀝青道路ハ日中ニ至レハ柔軟トナリ車馬之ヲ通スレハ凹凸ヲ生シ或ハ車輪等ニ附着シ良好ナラス

丁 「グリセー」油田

「スラバヤ」港ノ北東角ニ「グリセー」Griseeト稱スル一都會アリ、「スラバヤ」ヨリ小蒸氣船ニテ一時間ヲ要ス、此地ノ南西約三哩「スカルクラン」ト稱スル一村落ニ石油坑場アリ、一時稍盛ンニ經營シ三十餘ノ油井アリシモ現今ハ出油井僅カニ七坑ニ減シ事務員等ハ悉ク引上ケテ殆ント廢止ノ状態ニ陷レリ、油井ハ深キハ二千尺内外ニシテ總計約一二噸ノ產量ト推セラル、然レトモ何レモ自噴井ニシテ一モ汲取機ヲ附ケタルモノヲ見ス、井櫓ハ悉ク取毀チ偶々鐵棒ニテ作レル低キ三角櫓ヲ据付傍ラニ簡單ナル捲上ケ機ヲ附シテ油坑ノ浚渫用ニ供スルモノアルノミ
原油ハ暗褐色濃厚ノ種ニシテ土瀝青質ナリ、採取セルモノハ鐵管ニテ

「グリセー」ノ「タンク」ニ送り更ニ之ヲ「クロモ」製油場ニ送り製油スト云フ

坑場附近ノ地質ハ殆ント總テ第三紀石灰岩ヨリ成リ二枚介化石ヲ埋藏セルヲ認ム、其層向傾斜詳カナラス、「グリセー」附近ニハ「グノレンゲ」ト稱スル所ニモ試掘シタレトモ好果ヲ得スシテ廢止セリト云フ

「グリセー」ノ西端ニハ二箇ノ二百五十萬リートル「入大」タンク「アリ」、「チユブ」ヨリ重油ヲ「タンク」車ニテ送り來リ之ニ貯フルモノニシテ、之ヨリ海岸ニ至ルマテ鐵管ヲ敷キ船ニ移シ燃料トシテ主ニ「スラバヤ」、「マヅラ」ニ輸送ス、此他海岸ノ突堤上ニモ一大「タンク」ヲ設ケテ重油ヲ貯藏ス、重油ハ此地方ニテ石油罐一個ニ付一盾十仙即チ一石十一圓内外ナリト云フ

五 「スマトラ」島ノ油田

「スマトラ」島ノ油田ハ南北兩部ニ分タル、前者ハ「パレムバン」州ノ中央部に散在シ後者ハ東海岸州ヨリ「アチー」州ニ亙リ其海岸ニ頒布スル一帯

ノ油田ナリ

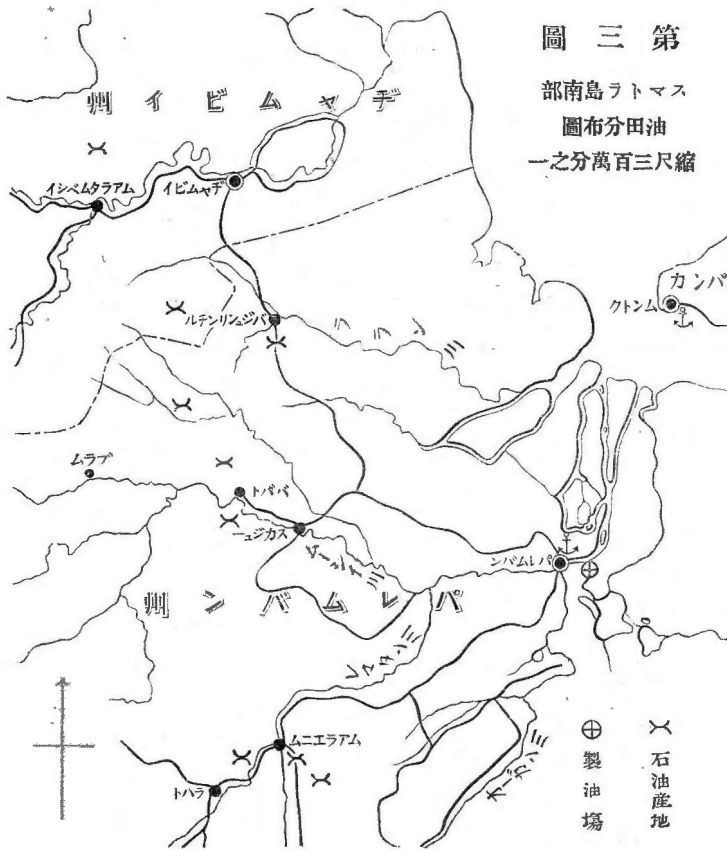
甲 南部油田

南部油田トハ「バレムバン」州ノ中央部ニ位スルモノ、總稱ニシテ之ヲ二區域ニ分ツコトヲ得、一ハ「レマタン」川ノ上流ナル「ムアラ、エニム」地方ニ於ケルモノニシテ之ヲ「ムアラ、エニム」油田 *Mearu Ehin* ト稱シ、一ハ「ムーシイ」川ノ中流ナル「スカジュー」附近ヨリ北方「ララン」川地方ニ互レル油田ナリ、「レマタン」及「ムーシイ」ノ兩川ハ下流ニ於テ相合シ一大河ヲナシ「バレムバン」ヲ過キ海ニ朝ス、「バレムバン」ヨリ「ムアラ、エニム」ニ至ル直徑距離ハ大約九十五哩又「スカジュー」ニ至ル直徑距離ハ大約七十哩ニシテ兩地共ニ「バレムバン」ヲ基點トシ一週一回「ロイヤルバケット」會社ノ定期船アリ

此地方ノ石油業ハ千八百九十年「ロイヤル、ダッチ」會社ノ「ムーシイ」川及「ララン」川附近ニ於テ試掘セルヲ嚆矢トシ、其後千八百九十七年ニ至リ「ムアラ、エニム」會社及「スマトラ、バレムバン」石油會社ナルモノ創立セラレ

圖 三 第

部南島ヲトマス
圖布分田油
一之分萬百三尺縮



テ前者ハ「ムアラエ
ニム」地方ニ於テ、後
者ハ「ララン」川ノ南
岸ニ於テ起業シ、又
千九百一年ニハ「ム
ーシイ」石油會社起
リテ「ムーシイ」川ノ
右岸ニ於テ採油ヲ
始メタリ、爾後近年
ニ至ルマテ此等ノ
諸會社ハ引續キ操
業シ來リシモ油田
ハ稍衰微ノ兆ヲ現
ハシ事業漸ク困難

ナラントスルニ際シ恰モ「バターフシェー」石油會社ノ買收スル所トナリ
 今ヤ主トシテ「ムアラエニム」及「スカジュー」四近ニ於テ採油ニ從事シ、又北
 方「チャムピイ」州方面ニ向テ試掘ニ著手セリト云フ
 「スマトラ」島南部油田地方ノ地質ニ就テハ「トブレ」氏ノ精査報告アリ、
 之ニ據レハ大略左ノ如ク分類セリ

第三紀 上部 漸新时期層

下部 中新时期層

中新紀

下部「バレムバン」層

青色無層理ノ頁岩及頁岩質砂岩ヨリ成リ動物化石ヲ埋藏ス

中部「バレムバン」層

頁岩及頁岩質砂岩ヨリ成リ炭層ヲ挾有シ植物化石ヲ埋藏

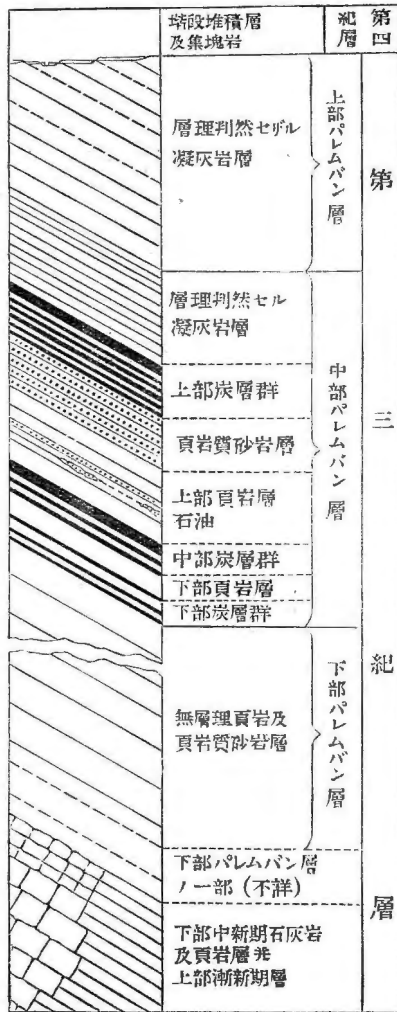
最新紀

上部「バレムバン」層

凝灰岩ヨリ成リ動物及植物化石ヲ埋藏ス

第 四 圖

第四紀塔段堆積層及集塊岩
 第三紀層ハ整合ニ累重シ層向東西乃至西北西ニシテ十數條ノ背斜軸アリ、又屢々「ドーム」構造ヲ作ス、石油ハ何レモ此等ノ背斜軸ニ沿ヒ其露
 スマトラ島南部地質柱狀斷面圖



ス、而シテ石油ト石炭トハ略同層座ニ位シ唯上部炭層群ノミハ一般ニ石油ヨリ上座ニアルモノ、如シ

主トシテ
 中部「パレムバン」層
 中ニ含蓄セラレ稀
 ニ下部「パレムバン」層
 層中ニ存

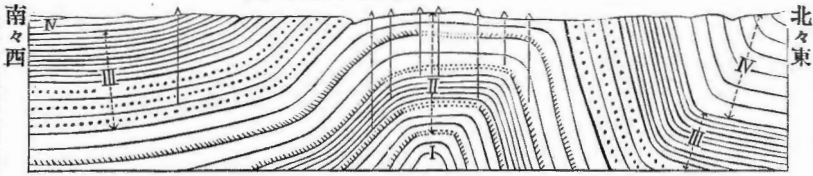
當時採油セル油田ハ左ノ如シ



「プラジュ」製油場ノ舊支配人タリシ「スート」氏ノ語ル所ニ據レハ此等油田ニ於ケル油井深度ハ隨處相異ナレリト雖モ千五百呎ヲ普通トシ總

第五圖

カボミンニヤ採油地質斷面圖



- I 下部パレムバン層 III 中部パレムバン層ノ上部
 II 中部パレムバン層ノ中下部 IV 上部パレムバン層
- ~~~~~ 含油部
 // 含水部

産額ハ日産大約千噸ニシテ悉ク「ブラジュー」製油場ニ受理ス、然レトモ近年各油田ノ生産高ハ著シク減少シ當時ハ諸方面ニ向テ盛ンニ試掘施行中ナリト云フ、含油層ハ二三層アリテ油井ノ多クハ掘止當時噴油シ時トシテ一晝夜ノ出油量二萬リートル以上ニ達シ九ヶ月間ニ互リ持續セルモノアリタリト云フ

「トーブレ」氏ノ調査ニ據レハ著名油田ノ一ナル「カムボン、ミア」ノ背斜構造ハ第五圖ニ示セルカ如クニシテ背斜ノ兩翼ハ急峻ナル傾斜ヲナセトモ鞍頂部ハ廣且ツ緩ニシテ石油ヲ胚胎スルニ最モ恰好ノ構造ヲ示セリ、三層ノ含油層アリ、最下部ノ第三油層ハ中部及下部「パレムバン」層間ニアリテ深サ千三百呎乃至千六百呎、油質ハ揮發油分ニ富メリ、然レトモ

比較的油量少ナク常ニ鹹水ヲ伴フ、第二油層ハ中部炭層群ト伴ヒ油量
 豊富ニシテ原油ハ前者ニ比スレハ稍重ク暗褐綠色ヲ呈ス、第一油層ハ
 頁岩中ニ介在セル砂層ニ原油ヲ胚胎スルモノニシテ油量頗ル豊富ナ
 リ

南部油田ノ原油ハ一般ニ燈油分及揮發油分ニ富ミ比重〇、七五九乃至
 〇、八五〇ニシテ燈油六割、揮發油二三割ヲ製出スト云フ、重油分ハ少量
 ニシテ大概「ローヤルバケット」汽船會社ノ燃料ニ供給セリ

上述鑛區ヨリ產出スル原油ハ悉ク「ブラジュー」製油場ニ受理スルモノニ
 シテ坑場ヨリ四吋鐵管ニテ流送シ途中「スカラミ」ト稱スル所ニ唧筒「ス
 テーション」アリ

製油場ハ「バレムバン」ノ下流二三哩ヲ隔テ、川ノ右岸ナル「ブラジュー」
 ニアリ、從前ハ此處ニ二箇所アリテ一ハ「ムーシイ、イリル」石油會社ノ所
 屬ナリシモ「バターフシュー」石油會社ニ併合以來全ク廢止セリ、當時就業
 中ノ製油場ハ三百八十萬「リートル」入原油「タンク」二個及之ヨリ稍小ナ

ルモノ八九個ヲ備へ、二列四組ノ精製蒸餾釜ヲ有シ一組ノ蒸餾釜ハ六個ヨリ成リ一個ノ容量三百「バール」(六十「リトル」ハ百)ナリ而シテ一日概ネ八百噸乃至千噸内外ノ原油ヲ處理セリト云フ、河岸ニハ凸字形ノ木道棧橋二三條ヲ設ケ船舶ノ出入荷物ノ上下ニ便セリ

「ブラジール」製油場ノ組織ハ左ノ如シ

製油場

主任 一名 試験掛 二名 精製蒸餾釜掛 十二名

製罐場

主任 一名 補助 二名 工夫 二百人

事務所

事務員 二名

地形及地質

地形 六名 地質 二名

倉庫

事務員 八名

其他雜務 十名

而シテ支配人一名アリテ工場ハ勿論油田全部ノ事業ヲモ統轄ス、白人ハ役員及技術者合シテ五十名内外ニシテ工夫ハ土人及支那人合シテ四五百人ナリ、工夫ノ賃銀ハ支那人一日六十仙、土人五十仙ノ定メニシテ十時間就業ス

本製油場ニテ製出スル燈油ハ冠印ニシテ悉ク輸出品ナリ

乙 北部油田

「スマトラ」北部ノ東海岸州「ランカト」ヨリ「アチエー」州「イヂイ」ニ至ルマテ延長大約八九十哩ニ互レル油帶ハ既ニ千八百八十五年頃ヨリ石油ノ探掘ニ從事セリ、千八百九十年「ローヤルダッチ」石油會社ノ成立スルヤ「ランカト」ニ近キ「レバン」川附近ニ起業シ「バンカラ」ン、「ブランダン」ニ製油場ヲ設立セリ、而シテ順次「アル」灣四近ニモ試掘シ何レモ相應ノ出油ヲ見ルニ至レリ、爾來一盛一衰多少ノ變遷ナキニアラサリシモ此ノ地方ハ

引續キ今日ニ至ルマテ操業シ現今主要ナル採油地ハ「バット、テラン」、「ベシタン」、「テラガ、サイド」、「サクラ」、「ペラ」等ニシテ「バット、テラン」ノ油坑ノミハ當時尙「マイン、ボシニ、ランドボウ、エキスプロイタチ」會社ノ所有ニ屬シ其原油ハ「ラン、カト」ニ近キ「ラントー、バンジャン」製油場ニ流送シ其他ノ坑場ハ悉ク「パンカラ、ブランダン」ニ送油ス、「アチュー州」ビールーラ「方面」モ近年大ニ發展シ當時一ヶ月ノ産額二千八百萬「リートル」ニ上リス「マトラ」北部油田中最モ活況ヲ呈ス、而シテ坑場ヨリ「パンカラ、ブランダン」ニ至ル百哩餘ノ間鐵管ヲ布設シテ原油ヲ流送セリ

地質ハ「トール、ブルル」氏ニ據レハ下部「バレム、バン」層ヨリ成レリ、「テラガ、サイド」ニハ二條ノ背斜軸アリテ三油層ヲ認メラレ、原油ハ〇、七七一乃至〇、八五七ノ比重ヲ有ス

「バット、テラン」ノ坑場ハ前述ノ如ク「マイン、ボシニ、ランドボウ、エキスプロイタチ」會社ノ所有ニシテ油井ノ數約百ヲ算シ製油場ト二條ノ四吋鐵管ヲ以テ連結セリ、本石油會社ハ油坑ノ外「ラントー、バンジャン」ノ製油

場ヲ所有シタリシモ一昨年九月「バターフシエ」石油會社ノ買收スル所トナリ目今油坑ノミヲ保留シ原油一「リートル」ニ付四仙ノ割ニテ製油場ニ販賣スルノ契約ナリト云フ

製油場ハ「ランカウト」フ「タンデオン、ブーラ」市外ナル「ラントー、バンジャン」ニアリ、規模小ニシテ目下五十人内外ノ役夫ヲ使用シ燈油及少許ノ揮發油ヲ製出ス、製罐場ニハ役夫二百人内外アリテ本邦人安藤某主任技師トシテ就職セリ、其語ル所ニ據レハ原油ハ約五割ノ燈油分ヲ含有シ日々龍印燈油一萬二千罐、「ベンジン」二十罐内外ヲ製出スト云フ、之ニ依テ考フルニ製油場ノ一日ノ製造力ハ大約千二百石即チ約二百噸ヲ下ラサルヘシ、從テ又坑場ノ產出高モ略之ヨリ推測スルコトヲ得、製品ハ悉ク「タンジョン、ブーラ」ヨリ河船ニ積込ミ小蒸氣ニテ曳キ「アル」灣口ニ位スル「スンピラン」島ノ貯油場ニ輸送ス、本工場ニ使役スル人夫ハ契約労働者ニシテ一日五十仙ヲ給シ十時間就業セシム、然レトモ製罐場ニテハ日々一定ノ仕事ヲ受負ハシムルヲ以テ從テ就業時間ハ一定セス、日曜

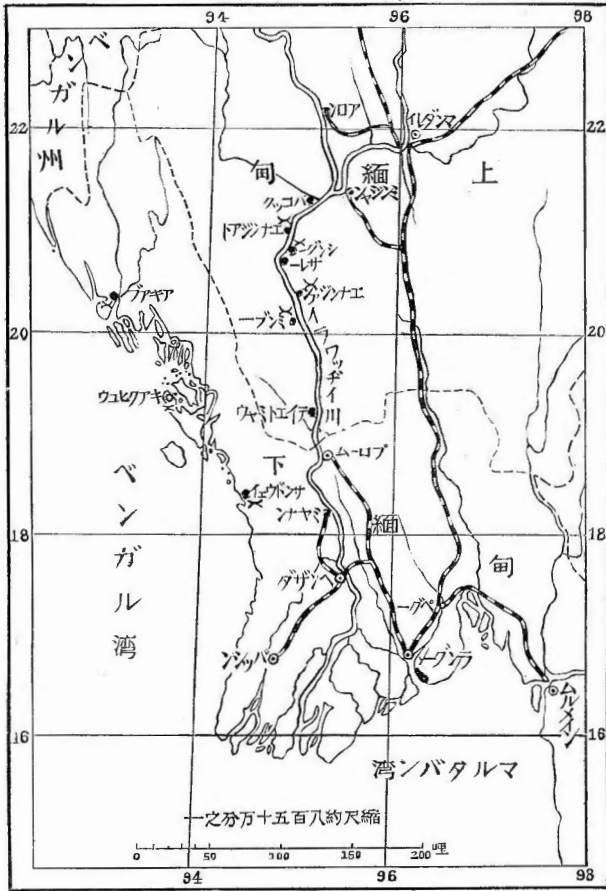
日ハ休業ス

此他「ラントー、バンジャシ」ニハ會社所屬ノ病院アリテ總テ施料トス
「バンカラシ、ブランダシ」製油場ハ「バンカラシ、ブランダシ」市中ニアリテ、
「テラガサイド」、「ベシタン」、「サクラ」、「ペラ」、「ビールーラ」坑場ノ原油ヲ受
理シ燈油、揮發油、機械油等ヲ製造ス、本製油場ハ「バリババン」ニ次ケル大
工場ニシテ其使用人夫ハ三千人ニ達スト云フ、製造品ハ一旦「スンピラ
ン」島貯油場ニ送り之ヨリ更ニ仕向地ニ輸出ス
聞ク所ニ據レハ此等ノ製油場ハ總テ近キ將來ニ於テ「バンカラシ、スス」
ニ移轉スルノ計劃ニテ目下同地ノ地均シニ着手セリト云フ

第三章 英領緬甸ノ石油業一斑

英領緬甸ニ於ケル石油ハ同國鑛產物中最モ主要ナルモノニシテ其產
額ハ年々千二三百萬留比^{ルビ}ニ上リ近來著シキ發達ヲ遂ケタリ、其產地ノ
主ナルモノハ「イラワツヂイ川」ノ上流二三百哩ニ位スル「エナンジアン」、「シ
ングー」、「エナンジアト」及「ミンブー」等トシ、此他西海岸ニ於ケル「アラカ

圖六第
圖布分田油甸緬



稱スル二十四家族ノ世襲的所有ニ屬スルモノナルコトヲ定メラレ、該

ン州ノ「アキアブ」及「キヤクピュー」等ニモ石油ヲ産シ多少試掘ヲ經タルモ

場油製 地産油石

ノアルモ未タ
開發セラル、
至ラス
一沿革
抑緬甸ノ石油
業ハ十八世紀
ノ中葉既ニ成
立シ當時「バガ
ン」王ニヨリテ
「エナンジアン」
地方ノ石油採
掘權ハ「WILLYOS」

家族以外ノモノニハ全ク賣買讓渡ヲ禁セラレタリ、而シテ多クノ手掘井穿掘セラレ油田ヨリ「イラワツヂイ」川ニ至ルニ哩餘ノ間ニ竹管ヲ布設シ自然送油法ヲ行ヘリ、千八百五十六七年頃王「ミンドン」ナルモノ出テ、獨占法ヲ行ヒ百「グイス」(約一「バーレル」)ニ付八安^{アジヤ}ノ價格ヲ以テ總テ所産ノ石油ヲ買上クルコト、セリ、其後千八百八十六年英領トナルニ及ヒ政府ハ產油百「グイス」ニ付八安ノ稅ヲ納メシメテ土人所有ノ坑區ヲ保留シ又油井及原油ノ賣買ヲ自由ナラシメ且ツ機械ノ改良ヲ計ル等斯業ノ保護獎勵ニ努メシカハ漸次其產額ヲ増加セリ、然レトモ油井ハ尙手掘ニシテ一日ノ所産漸ク數十「グイス」ヲ超エス、其深サモ亦百呎乃至三百呎ヲ普通トシ二百呎乃至二百五十呎ノ油層最モ豐富ナリシト云フ

本油田ニ機械鑿井ヲ採用セルハ千八百八十七年即チ今ヲ去ルコト二十六年前ニシテ、二年ノ後始メテ成功シ僅々五百呎ノ油層ヨリ一日五「バーレル」乃至二十「バーレル」ヲ產出スルニ至レリ、之ヨリ當油田ハ其有

望ナルコトヲ世人ニ認メラレ爾來續々トシテ機械井増加シ深サ千呎乃至千二百呎ノ油層ニ達シ產油モ亦大ニ増加セリ、近年ニ至リ政府ハ手掘井ノ無秩序ニシテ亂掘ニ陥リ油田ノ發展上弊害アルコトヲ認メ法律ヲ以テ斷然之ヲ禁止セリ、之ト同時ニ從來土人ノ探掘セル坑區及油井ハ各石油會社ノ買收スル所トナリ大ニ機械井ヲ開掘スルニ至リシカハ茲ニ「エナンジア」油田ハ全ク面目ヲ一新セリ

「エナンジア」油田ハ既ニ三十餘年前ヨリ露出油ヲ採取シ或ハ淺キ手掘井ヲ掘リテ採油シ來リシ所ナリ、近年ニ至リ緬甸石油會社 *Burma Oil Co.* ハ機械井ヲ開掘シ一時稍盛ニ事業ヲ經營セシモ現今油量減少シ大ニ衰微セリ、此他「エナンジア」ト「エナンジア」トノ中間ニ位スル「シング」油田ハ千九百一年ノ開發ニ係ル新油田ニシテ目下活況ヲ呈スルモノナリ

二 生産額

緬甸ニ於ケル石油業ハ千八百八十九年ノ機械鑿井ノ成功以來年々著

シク發展シ、千九百九年ニハ原油産額二億三千萬「ガロン」ニ上リシモ、其翌年ニハ約二千萬「ガロン」ヲ減シ聊カ油況銷沈ノ傾向ヲ示セリ、然レトモ千九百十一年ニハ再ヒ千百萬「ガロン」ヲ増加シテ二億千百萬「ガロン」ヲ産出シ稍景氣ヲ恢復スルニ至レリ、本官ノ親シク油田ヲ巡回視察セル所ニ依レハ緬甸總産額ノ大部分ヲ領セル「エナンジアン」油田ハ油井ノ數甚タ多ク其間隔ノ如キ既ニ殆ント規定ノ最小限度ニ至ルマテ密接シ且ツ其出油量モ亦敢テ多トスルニ足ラス恰モ我邦西山油田ノ觀アリ、之ヲ以テ考フルトキハ緬甸ニ於ケル石油業ノ目下ノ狀態ハ他ニ新油田ノ開發セラレサル限り既ニ最盛ノ時機ニ達セルモノト云フヘシ、左ニ千八百七十八年以來ノ産出額ヲ示サン

年次	數	量 (ガロン)	價	額 (留比)
一八七八—一八七九年		七九二、〇五三		
一八七九—一八八〇年		一、五三八、八九六		
一八八〇—一八八一年		一、八三二、五八八		

一八八一—一八八二年
一八八二—一八八三年
一八八三—一八八四年
一八八四—一八八五年
一八八五—一八八六年
一八八六年
一八八七年
一八八八年
一八八九年
一八九〇年
一八九八年
一八九九年
一九〇〇年
一九〇一年

一、四一一、六六六
一、七四四、四七五
一、六四四、八四六
一、八九一、五五二
一、八七一、三五〇
一、四五三、七五二
二、三七二、四〇〇
二、五九一、三七二
二、八六八、一三二
四、三一〇、九五五
二一、六八四、九六三
三二、三〇九、五三一
三六、九七四、二八八
四九、四四一、七三六

三〇、三一、五九五

一九〇二年	五四、八四八、九八〇	三一、七九、〇〇一
一九〇三年	八五、三二八、四九一	五一、八八、六三八
一九〇四年	一一五、九〇三、八〇四	六九、四七、五五六
一九〇五年	一四二、〇六三、八四六	八八、九一、九〇七
一九〇六年	一三七、六五四、二六一	八四、六九、九九五
一九〇七年	一四八、八八八、〇〇二	八九、九三、八二六
一九〇八年	一七三、四〇二、七九〇	一、〇三、六九、六〇七
一九〇九年	一三〇、三九六、六一七	一、三四、九〇、一四〇
一九一〇年	二一一、五〇七、九〇三	一、二三、七四、四三六
一九一一年	二二二、二二五、五三二	一、三〇、八九、三四五

本表ニ就テ見ルモ緬甸油田ハ千八百九十年前後即チ機械鑿井ノ應用以來急速ノ發展ヲナセルコトヲ示セリ、其状態ハ恰モ明治二十四年我尼瀨油田ニ始メテ試掘シタル米國式機械鑿井ノ成功以來我石油業ノ駁々トシテ進歩セルト同一轍ニシテ且ツ殆ント時機ヲ同フセルハ奇

ト云フヘシ

三 石油會社

緬甸ノ石油業ハ初メ土人ノ經營スル所ナリシモ英領トナルニ及ヒ石油會社成立シテ新式ノ機械鑿井法ヲ施行シ漸次土人所有ノ油井并ニ坑區ヲ買收シ今ヤ石油業ハ殆ント全ク此等會社ノ經營ニ屬セリ、而シテ又諸會社モ近年ニ至リ併合若クハ買收セラレシモノ多シ、目下事業ヲ經營セル會社及其資本金ハ左ノ如シ

會社名及其略名	資本金	拂込資金	配當
(一) British Burma Petr. Co. (BBPO)	{ 三,500,000 磅 借入 五,000 "	二,500,000 磅	五分
(二) Burma Oil Co. (BOC)	三,500,000 "	{ 第一 一,200,000 第二 二,300,000 七,500,000 "	六分
(三) Indo-Burma Oil Co. (IBOC)	80,000,000 留比	三,八一,三〇〇 留比	—
(四) Nath Singh Oil Co. (NSOC)	10,000,000 "	一,200,000 "	—
(五) Rangoon Oil Co. (ROO)	80,000 "	{ 甲 三,200,000 乙 七,200,000 "	—

内 I B O C 會社ノ株ハ殆ント全ク Steel Brother Co. ノ掌中ニ歸シ市場ニ賣買セラレス

以上ノ内 (一) (二) (三) ハ「イラワツヂイ」川ノ上流ニ坑場ヲ有シ「ラングーン」市ニ近ク製油場ヲ設置シ諸種ノ鑛油ヲ製造セリ、其他ノ會社ハ單ニ採油事業ヲ經營スルノミニシテ原油ヲ前記諸會社ニ販賣スルモノトス、而シテ此等諸會社中最モ盛大ナルモノハ B O C 會社ニシテ「エナンジアト」及「シングー」油田ノ殆ント全部及「エナンジアン」油田ノ大半ハ該會社ノ所有ニ屬ス、各會社ハ何レモ本店ヲ「ラングーン」ニ置キ油田ニハ「エヂエン」ト「ラ」派遣シテ事務ヲ司ラシメ本店及油田間ハ電信ヲ以テ通信シ各油田間ニハ電話ヲ設備セリ

四 原油ノ輸送

坑場ニテ採取セル原油ハ四吋乃至八吋ノ鐵管ユテ或ル貯油場ニ流送シ、是ヨリ「オイル、フラット」ト稱スル淺吃水ノ油槽船ニ移シ「イラワツヂイ」川

艇隊會社 Irrawaddy Flotilla Co. ノ汽船ヲシテ之ヲ曳カシメ川ヲ下リ「ラング
ーン」ノ製油場ニ輸送スルモノトス、其ノ運賃明カナラサレトモ百「ヴイ
ズ」ニ付十二安ヲ要スト云フ、然ルニBOC會社ハ「エナンジアト」ヨリ「シ
ングー」油田ヲ經「エナンジアン」油田ニ至ルマテ送油鐵管ヲ敷設セルノ
外、千九百七年「エナンジアン」ト「ラングーン」間約二百七十五哩ノ間ニ十
吋鐵管布設ノ工事ヲ起シ千九百九年ニ一度竣工シタレトモ、原油ハ多
量ノ「バラフィン」ヲ含ミ溫度ノ變化ニヨリ屢々管内ニ凝結シ送油上故障
ヲ起スコト少ナカラサルヲ以テ再ヒ改工事ニ着手シ鐵管ヲ地中ニ埋
沒シ且ツ「Godenit」ト稱スル回轉機(?)ヲ用キ送油上ノ障害ヲ除ケリト云フ、
途中「エナンジアン」及「セゴン」ノ二箇所ニ唧筒「ステーション」ヲ設置セリ、
此等ノ送油機關ニ就テハ會社ハ他人ノ參觀ヲ好マサルヲ以テ遂ニ其
要領ヲ得ルコト能ハス、聞ク所ニヨレハ鐵管布設ノ際最モ困難ナリシ
ハ「イラワッチイ」川ヲ横キリテ「シリア」製油場ニ至ル河底工事ナリシト云
フ、蓋シ其附近ハ河幅三千呎内外ニシテ潮水ノ干滿著シク從テ河勢急

ニ、加之河水ノ溷濁甚シク極メテ濃厚ナル泥水タルヲ以テナリ、イラソツ
ヂー艇隊會社ニ屬スル一客船ノ船長ハ語リテ曰クB O C會社ノ鐵管
布設ハ其材料ト工事トニ莫大ノ費用ヲ費ヤシタルモノニシテ原油ノ
輸送上便ハ即チ便ナリト雖モ油槽船ヲ用フルニ比較セハ到底後者ノ
廉ナルニ如カスト、是レ或ハ我田引水論ナルヤ計ルヘカラサルモ亦傾
聽スヘキ言ナリトス

五 製油場

諸石油會社中製油場ヲ有スルハB B P C、B O C及I B O Cノ三會社
ナリ、本官ハ此等ノ會社ヲ訪ヒ官命ヲ帶ヒ緬甸ノ石油業視察ノ爲メ渡
航セシ旨ヲ告ケ製油場ノ參觀ヲ求メシモ其許可ヲ與ヘタルハB O C
會社ノミニシテ他ハ悉ク拒絕セリ、蓋シ緬甸ノ諸石油會社ハ製油場若
クハ坑場ノ狀況ヲ秘密ニシ他人ノ參觀ヲ許サス、某會社ノ如キハ其株
主タリトモ濫リニ工場ニ入ラシメスト云フ
本官ハ幸ニB O C會社ノ製油場ヲ參觀スルノ特許ヲ得シモ僅々二時

間ニシテ簡單ニ工場内ヲ一巡セルニ過キス、B O C 會社ノ製油場ハ「ラ
ングーン」市ノ東端ナル「ダンニードウ」Dunneedah 及三角洲上ニ位スル「シリ
ア」Syriaノ二箇所ニアリテ其主要ナルモノハ「シリア」工場ナリ、本官ノ參
觀セルハ即チ是ナリ、該工場ニ送ルヘキ原油ハ一旦「ペグ」川ノ右岸ニ貯
油スルモノニシテ此處ニ四五十萬「ガロン」入ノ「タンク」十箇其他稍小ナ
ルモノ二個及唧筒ヲ設置シ、之ヨリ八呎鐵管ニ據リ約三千呎ノ河底ヲ
横リテ工場ニ送油スルモノトス

「シリア」工場ハ「ダンニードウ」棧橋ヨリ小蒸氣ニテ約二十分ヲ要ス、工場
ノ河岸ニハ二條ノ棧橋ヲ架シ軌條ヲ敷キ製品ノ搬出ニ便ニス、然レト
モ此棧橋附近ハ河水淺ク僅カニ小蒸氣ヲ繫泊シ得ルニ過キサ、ルヲ以
テ荷物ハ凡テ一旦河船ニ積込ミ更ニ汽船ニ移シテ輸出ス、工場内ニハ
製油場、「バラフィン」蠟製造場、蠟燭製造場、製罐場及倉庫等アリテ四十萬「ガ
ロン」入ノ原油「タンク」六個并ニ製品入大「タンク」二十餘個ヲ設備セリ、其
他工場ニ接シテ社宅、俱樂部等アリ、又構内ニハ軌條ヲ敷キ輕便機關車

ヲ用キ貨物ヲ運搬スル等其設備頗ル完全セリ、精製蒸餾釜ハ約二十噸入五基ヲ並ヘテ一組トシ總計約八組アリ、重油ヲ焚キ蒸氣ヲ吹込ミ原油ヲ蒸餾スル仕掛ニテ初メ二基ノ釜ニテ揮發油ヲ得、之ヲ第一號油トス、其殘リヲ次ノ二基ニ移シ燈油及輕油ヲ得、之ヲ第二號油トス、其殘リヲ更ニ次ノ釜ニ移シ第三號油即チ機械油類ヲ蒸餾收得ス、殘滓ハ別ニ設置セル圓形ノ釜ニ入レ之ヲ攪拌シツ、高溫度ノ熱ヲ加ヘテ蒸餾ス、流出物ハ即チ「バラフィン」油ナリ、而シテ其殘留物ハ骸炭ノミニシテ外觀上毫モ石炭ヨリ得タルモノト異ナル所ナシ

「バラフィン」油ハ一旦「タンク」ニ移シ更ニ「バラフィン」蠟製造場ノ冷却庫ニ導キ其中ニ据付ケタル四個ノ木箱ニ凝固沈澱セシム、夫ヨリ次ノ冷室ニ導キ水平「フィルター」プレスニ掛ケ再ヒ次室ニ移シテ簡單ナル上下壓搾機ニヨリ重油ヲ搾出ス、斯クテ得タル「バラフィン」蠟ハ尙黃色ヲ帶ヒ不純ナルヲ以テ地中ニ設ケタル「タンク」中ニ投入シ蒸氣ヲ通シテ溶解セシメ更ニ之ヲ洗滌シ(其方法ハ參觀ヲ許サス)純白ノモノトナス

蠟燭製造場ニテハ「バラフィン」蠟ヲ再ヒ熔融セシメ蠟燭製造機ニ流レ込マシムルノ仕掛ヲナス、該製造機ハ厚キ鐵板ニ蜂巢ノ如ク圓形ノ穴ヲ穿テルモノニシテ穴毎ニ絲心ヲ通シ之ニ蠟ヲ流シ込ムモノニシテ一臺三百本ヲ製出ス、目下一日ニ約二十噸（普通八本ヲ以テ一封度トス）ヲ製造シ之ヲ二百本詰ノ箱トナシ或ハ半打ノ紙包トシテ輸出ス、而シテ蠟燭製造場ニハ又之ヲ輸送スル木箱ノ製造場附屬シ板切機、釘付機、捺印機等一切ヲ設備セリ

製出燈油ハ數種ニ區別シ罐ニ詰メテ販賣ス、緬甸ニテハ普通一罐ヲ一函トシ揮發油ハ悉ク圓筒形ノ鐵罐ニ入レテ輸出ス

BOC會社ノ「シリア」製油場ヨリ約十數分ヲ下レハ左岸ニIBOC會社ノ製油場アリ、二百萬「ガロン」入二個、百萬「ガロン」入二三個、他ニ五十萬及二十萬「ガロン」入七八個ノ「タンク」ヲ設備セリ、之ヨリ約三十分航程ヲ下レハ又左岸ニBBPC會社ノ製油場アリテ百萬「ガロン」入ノ「タンク」六個ヲ目撃ス、此等ハ何レモBOC會社ノ製油場ニ比スレハ規模甚タ

小ナリ

製油上ニ必要缺クヘカラサル硫酸ハ別ニ British Burma Chemical Industry Co. ナル會社ニ於テ製造ス、當時我三井物産會社ヨリ毎月三百噸内外ノ硫黄ヲ同會社ニ販賣セリト云フ

各會社ノ製油力ハ極メテ祕密ニ附スルヲ以テ詳カナラザレトモ或記録ニ據レハ大略左ノ如シ

會社名	一日ノ製造力 <small>(バレル)</small>	
B O C 會社	一一、五〇〇	「ダンニードウ」及「シリア」ノ二個所合算
I B O C 會社	二、〇〇〇	
B B P C 會社	五、〇〇〇	

六 輸出入

緬甸石油ハ國內ノ消費ニ充ツルノ外ハ悉ク外國ニ輸出ス、千九百四年ヨリ同五年ニ互リ東洋各地ニ於テ米油ト競争ヲナセシ結果緬甸油ノ

印度立脚地ニ動搖ヲ起スニ至リ遂ニ兩者ハ協定シ満足ナル解決ヲ得
 タリ、以來緬甸油ハ全カヲ印度ニ注キ近年 Chitagon, Calcutta, Madras, Bombay,
 Marmagoa, Karachi, Coconada, Tuticorin, Cochin 等ニ大油槽ヲ設ケタリ、又「バラフィン」蠟
 蠟燭等ノ輸出モ近年増加シ、特ニ Batching Oil (「ジニート」製造ノ原料ヲ滑
 ル州ノ「ジニート」製造場ニ確固タル地盤ヲ占ムルニ至レリ
 左ニ輸出表ヲ掲ケン (年度ハ其年ノ四月ヨリ 翌年三月ニ終ル)

燈 油 (數量ハ「ガロン」 價額ハ留比)

其 他	英領印度		一九〇六年度	一九〇七年度	一九〇八年度	一九〇九年度	一九一〇年度
	數量	價額					
價額	九	二六	二二	一〇三	三、九三、四六八	一、九八、九五二	
數量	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	
價額	五七、一八〇、九〇八	六九、三三三、三三二	六六、二〇六、六七四	八五、八九四、四七七	九八、五七七、七四二	三、五二、三六、七六一	
數量	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	二、二、八七、四八八	

「バラフィン」蠟 (數量ハ封度 價額ハ留比)

英領印度		其 他	
數量	價額	數量	價額
一九〇六年度	1,031,184	五,355,336	九,957,740
一九〇七年度	622,976	1,246,955	1,687,285
一九〇八年度	677,100	1,273,277	1,832,802
一九〇九年度	592,250	1,164,233	356,839
一九一〇年度	1,218,544	2,277,901	5,078,822

蠟 燭 (數量ハ封度
價額ハ留比)

數 量	價 額
一九〇六年度	四,933,015
一九〇七年度	5,307,522
一九〇八年度	4,397,729
一九〇九年度	4,412,422
一九一〇年度	4,996,291

其他ノ鑛油 (數量ハ「ガロン」
價額ハ留比)

英領印度	
數量	價額
一九〇六年度	2,995,233
一九〇七年度	4,200,472
一九〇八年度	3,267,744
一九〇九年度	4,772,803
一九一〇年度	4,747,366

其	他	
	數量	價額
	八二九、六三九	二二、四、二一〇
	五、六四〇、六九一	五、三、一〇三
	一、八三三、〇八九	一、七、九、六四八
	三、八五〇、一六〇	四、九、五、二七
	二、一七四、九九九	二、六、三、九三

即チ燈油ハ專ラ英領印度ニ輸出シ近年ニ至リ多少馬來半島及支那ニ輸出セリ、「バラフィン」蠟ハ英國、日本、亞非利加ヲ始メトシ濠洲方面ニ輸出ス、而シテ蠟燭ノ主ナル輸出先ハ錫蘭、馬來半島、印度支那及支那等ニシテ何レモ年々五十萬封度以上ニ上レリ

緬甸ノ國油ハ以テ其消費高ヲ充タスニ足レリト雖モ尙米國ヨリ燈油ヲ輸入ス、最近五年間ノ輸入高ヲ示セハ左表ノ如シ（數量ハ「ガロン」價額ハ留比）

	一九〇六年度	一九〇七年度	一九〇八年度	一九〇九年度	一九一〇年度
數 量	一、五四九、一五七	二、一三〇、五九二	二、一〇六、一七六	一、三九〇、三八〇	一、二七六、一四〇
價 額	九、二八、〇九七	二二、四、六四三	二一、八、二四六	七、五、五、六四七	七、二、〇、一八六

七 緬甸ニ於ケル燈油ノ消費高及價格

「ラングー」市ニ於テB O C會社ノ燈油ノ一手販賣者タル「支那人」

語ル所ニ據レハ緬甸國內ニ於ケル燈油ノ消費高ハ一日大約一萬函(一
 鐘)即チ一年三百六十五萬函ニシテ其大部分ハ國油ヲ以テ之ニ充テ、外
 油ハ消費高ノ約一割乃至一割五分ヲ輸入スルニ過キスト云フ、
 緬甸油ト外油トノ價額ヲ對比スルニ左ノ如シ(輸入税ハ「ガロン」ニ付一安半
 錢ニ當レリ) (二十四)

米油		虎	印	十函ニ付	額				
ラ	タ	ー	リ	リ	イ	二五、〇			
オ	リ	エ	ン	タ	ル	二二、八			
ゴ	ー	ル	ド	モ	フ	ル	二二、〇		
ラ	シ	ユ	ド	オ	イ	ル	一七、八		
ア	ン	ラ	シ	ユ	ド	オ	イ	ル	一六、一四

* 印ハ多ク土人ノ「カンテラ」ニ使用スルモノニシテ極メテ粗製品ナリ、

蓋シ内地土民ハ未開ノモノ多ク現ニ産油地ノ原油ヲ其儘燈油ニ使用
スルモノアルカ故ニ斯ル粗製品ノ市場ニ現ハル、コト敢テ怪ムニ足
ラス

八 鑛區所有權及税金

緬甸ニ於ケル鑛區ノ所有權ハ英人若クハ英領人民ニ限り與ヘラル、
モノニシテ一鑛區ノ面積ハ一平方哩ヲ以テ限度トス、試掘ハ一年ノ期
限ニテ每一「エーカー」一留比以下ノ稅ヲ徵シ、探掘ハ每一「エーカー」一留
比ノ稅ヲ徵ス、而シテ石油ニ對スル鑛產稅ハ一年四十「ガロン」ニ付八安
ノ割合ニシテ價格ノ百分ノ五ニ當レリト云フ

九 政府ト石油業

緬甸ノ英領トナルニ及ヒ政府ハ從來土人ノ無秩序ナル石油業ヲ取締
リ或ハ土人ノ探掘區域ヲ規定シ或ハ土人ニ石油並ニ油井賣買ノ自由
ヲ與ヘ、又地質學者「ネットリング」氏ヲシテ油田ノ地質ヲ調査セシメ、千八
百九十年ニハ油田ノ地形測量ヲ施行シテ各地ノ油田區域ヲ定ムル等

種々ノ獎勵法ヲ採リシ爲メ石油業ハ年々著シク進歩セリ、而シテ近年ニ至リ土人ノ手掘法ハ濫掘ノ弊ヲ來タシ油田ノ發展ヲ阻害スルノ恐アルヲ以テ法令ヲ發布シテ斷然之ヲ禁止セリ、爾來土人ノ坑區及油井等ハ殆ント悉ク石油會社ノ手ニ買收セラレ機械鑿井ノミトナリシカハ是ヨリ一層斯業ノ發達ヲ促セリ、現今ニ於テハ政府ハ特ニ石油業ニ對シテ施設スル所アルヲ聞カス、然レトモ各會社ハ競ヒテ新油田ノ開發ニ努メ絶エス、專家ヲ諸方ニ派シテ油田地質ノ調査ヲナサシメ其稍價値アルモノヲ發見スルトキハ直チニ試掘ヲ施行セリ、「シンダグ」及「ミンブー」油田ノ開發ハ即チ其結果ニ外ナラス

十 氣 候

氣候ハ乾季及雨季ニ分タレ、雨季ハ五月中旬ヨリ十一月ニ互リ此間溫度高カラス、乾季ハ十一月ヨリ五月初旬ニ至ル間ニシテ最初ノ二三ヶ月間ハ時候溫和ナリト雖モ四五五月ニ入レハ溫度其極ニ達シ、現ニ本年五月本官巡回ノ際ノ如キ室内ニ於テモ屢々華氏百十度内外ニ上リ酷

熱殆ント堪エ難ク野外ノ調査ハ常ニ早朝ニ於テ晝間ハ終日休息セリ、緬甸領土中此油田地方即チ「バコック」及「マグエイ」兩州ハ一面ノ臺地ニシテ樹林ニ乏シク恰モ砂漠ノ如ク特ニ酷熱區域ニ屬ス

第四章 緬甸ニ於ケル油田

千八百九十一年「ネットリング」氏ノ報告ニヨレハ當時ハ上部緬甸ノ油田ヲ(一)「ツキンゴン」Twingon (一)「ズーメ」Beme (二)「エナンジヤット」Yenangyat ノ三個所ニ分テリ、然レトモ其後(一)及(二)ハ連續シテ一油田トナリ其他「シングー」Singu 及「ミンブー」Minbu 油田等開發セラレ現今ニ於テハ四個ノ油田アリ

一 「エナンジヤン」油田

位置 「エナンジヤン」Yenangyang ハ「イラワッヂイ」河畔ニアリテ「ラングーン」ヨリ約二百七十五哩「ブローム」ヨリ約百四十哩ノ上流ニ位スル一部落ナリ、往昔「アラカン」入種此地ヲ Rainaiphong ト呼ヘリ蓋シ Rainan ハ緬甸語ノ Yenan ト同意義ニシテ「腐敗セル水」ヲ意味ス、即チ此地ハ古來ヨリ石油ノ

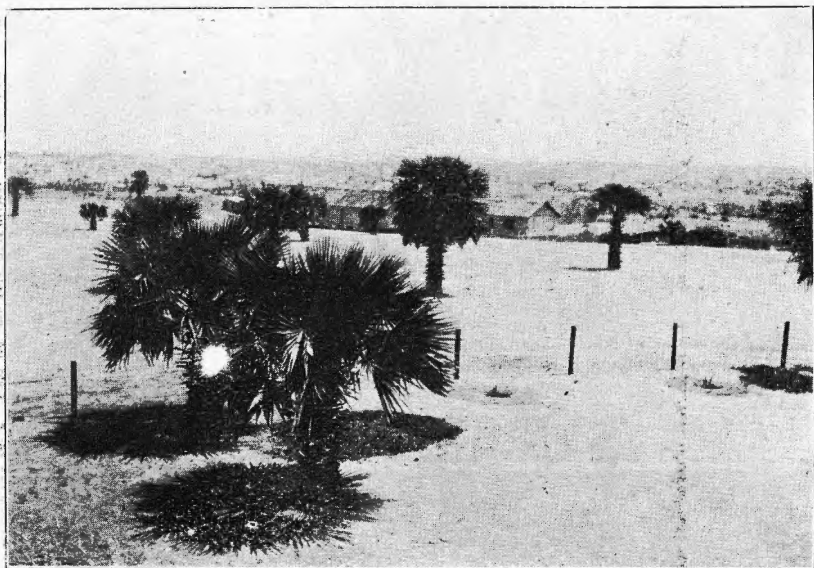
存在ヲ認メラレ斯ル名ヲ附セラレタルモノニシテ恰モ我國ニテ石油
ノ產地ニ草生^{クソウ}水^{スイ}ト稱スル所アルカ如シ、現時「エナンジア」ハ行政上「マ
グエイ」州ノ一都會ニ屬スルヲ以テ時ニ「マグエイ」油田ト稱セラル、コ
トアリ

産油地ハ部落ノ東方直徑二哩ノ處ニ位シ嘗テ「ツウインゴン」及「バーメ」
ノ二坑區ニ分タレ久シク土人ノ專有ニ屬シ、B O C 會社ノ如キハ其中
間ノ地タル「コーダン」ニ鑿井シタリシカ近年ニ至リ全ク連續シ坑區モ
亦大ニ擴張セラレタリ

「エナンジア」部落ノ沿岸ハ水淺ク河船ノ繫泊ニ不便ナルヲ以テ現今
ハ之ヨリ南方約三哩「ニャンフラ」^{Yangbala}ト稱スル所ニ「イラワッチ」艇隊
會社ノ汽船繫留場ヲ設ケ貨物ノ出入悉ク之ヨリス、而シテ各石油會社
ノ事務所、社宅、貯油場等皆此地ニ建設セラル

地勢 抑緬甸中部ハ西ニ白堊紀層ヨリ成レル「アラカン」山脉アリ、東ニ
變成岩及古生層ヨリ成レル「サルキン」山脈(假稱)アリテ何レモ略南北ニ

原高キナ崖際里千眸一ム望ヲ方地田油方北リヨラフンヤニ「旬緬



走リ其中間地帯ハ第三紀層ヨリ構
 成セラル、一帯ノ臺地ナリ、本地帯
 ハ南部即チ「ブローム」附近ニアリテ
 ハ數百呎乃至千呎ノ丘陵起伏スレ
 トモ北部「マグエイ」及「ミンヂャン」州ニ
 至レハ二三三百呎ノ純然タル臺地ニ
 シテ一眸千里殆ント際涯ナキ高原
 ナリ、「エナンシヤン」油田ハ即チ其臺
 地ノ一端ニ位シ河水面ヲ抜クコト
 約二百呎、河岸ハ一般ニ斷崖ヲナセ
 リ、臺地上ハ或二三種ノ樹木點々生
 育スルノ外、殆ント目ヲ遮キルモノ
 ナク荒漠タル砂地ニシテ恰モ砂漠
 ノ觀アリ、隨テ乾季ニアリテハ屢々

「サンド、ストーム」Sandstormヲ起シ本官モ亦兩三回之ニ遭遇セリ、本油田ヲ横キリテ東西ニ走レル二三ノ溪流アレトモ乾季ニハ何レモ些少ノ水量ヲモ見ス、故ニ坑場ノ用水ハ悉ク「イラワッヂイ」川ヨリ汲上ケ之ヲ使用セリ

地質 「ネットリング」氏ノ調査ニ從ヘハ「エナンジアン」附近ヲ構成スル地層ハ左ノ如シ

中新期

下部 暗灰色頁岩及砂岩層(含油層)、本層ノ下部ニ *Anthracoherium silivense* ヲ埋藏ス

上部 褐色頁岩及砂岩層石膏ヲ含有ス

最新期

下部 鐵蠻岩層 *Hipparion antilopinum* 及 *Acrotherium perimense* ヲ埋藏ス

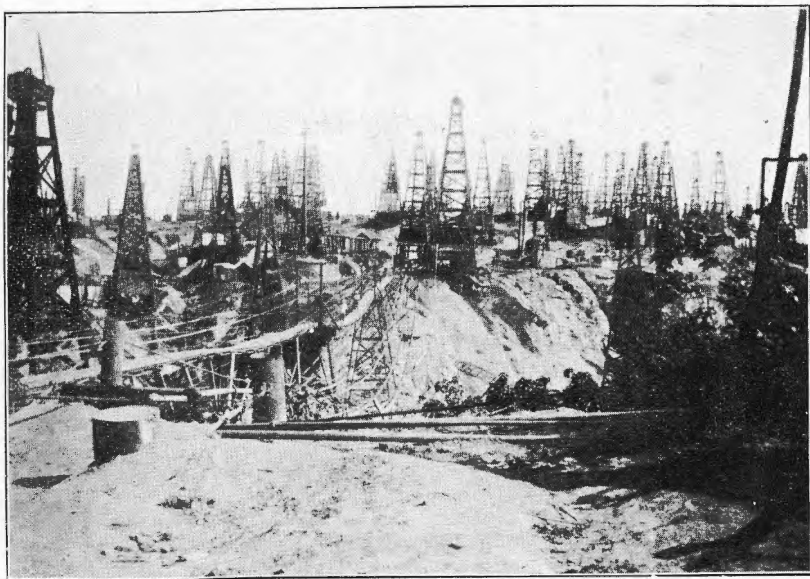
上部 黃色砂岩層 *Mastodon latidense*, *Hippopotamus irawadicus* ヲ埋藏ス

第四紀河礫層

中新期下部層ハ「ツキンゴン」及「ベーム」ノ川筋ニ小露出ヲナスニ過キサレトモ地下一面ニ敷衍シ原油ヲ胚胎スル重要ノ地層ナリトス、上部層ハ油田地域ノ中央部ニ稍廣ク現ハレ、其邊緣ニ最新期蠻岩ノ薄層アリ、

最新期上部層ハ軟砂岩ニシテ黃色ヲ帶ヒ前述地層ヲ蔽フテ最モ廣域ヲ領ス、エナンジアン^{〔及〕}ニヤンフ^ラ部落附近ノ臺地上處々ニ礫岩現存シ第三紀層ヲ不整合ニ被覆セルモノ是レ即チ第四紀河礫層ナリ前記第三紀層ハ悉ク整合的ニ累重シ大體ニ於テ南北ノ走向ヲ保チ、ツキンゴン^{〔及〕}ベーム^{〔ノ〕}二箇所ニ「ドーム」構造ヲ形成セリ、是レ昔時油田ノ二區ニ分レタル所以ニシテ現今兩者相連續セリト雖モ其中間ニ當ル部分ハ地層稍沈降スル所ナルヲ以テ出油少ナク從テ井櫓ノ存在稀ナリ、「ドーム」ノ西翼ハ四十度内外ノ傾斜ヲナセトモ東翼ハ十度乃至二十度ニ緩斜シ石油ヲ胚胎スルニ極メテ恰好ノ地質構造ヲ呈ス、而シテ此地方ハ樹林雜草ニ乏シク地表ハ風雨ノ剝削ニ委スルヲ以テ岩石ノ露頭頗ル良好ニシテ「ドーム」構造ノ如キ明カニ之ヲ觀察スルコトヲ得、油田區域ハ南北約二哩餘、東西約三分ノ二哩ニ互リ稍廣域ヲ占ム油層ハ舊手掘時代ニハ其知ラレタルモノ數層アリテ地下八十呎乃至三百呎ノ間ニ横タハリ第三及第四油層最モ豊富ナリシト云フ、然レ

區坑^ンゴ^ンキ^ツ田油^シア^ツン^ナエ^フ旬^編



トモ今日ニ於テハ此等ハ殆ント
涸渴シ油井ハ何レモ千呎以上掘
下シテ油層ニ逢著ス、聞ク所ニ依
レハ千呎乃至千四百呎ノ間ニ
於テ尙二三ノ油層存スルモノ、
如シ、石油ハ何レモ砂岩中ニ含著
セラレ未タ嘗テ頁岩ニ含マル、
モノヲ見ス

油井及出油量 油井ノ淺深、出油
量、掘鑿ノ難易等ニ就テハ之ヲ掘
鑿者ニ問フモ殆ント悉ク口ヲ緘
シテ語ラス、故ニ精密ナル數字ハ
之ヲ知ルニ由ナシ
油井間ノ距離ハ六十呎ヲ以テ最

小限トスルノ規則ニシテ今日ニ於テハ極メテ密接シ殆ント其最小限度ニ達セントシ、隨テ各會社ノ油井互ニ入り亂レ區域頗ル錯雜セリ、油井數ハ約七百坑ニシテ内約四百坑ハB O C會社、約三十坑ハN O C會社ニ屬シ、其他ハR O C、B B P C及I B O C會社等ノ所有ナリ、油井ノ深サハ大概千呎乃至千四百呎ニシテ二千呎ヲ超ユルハ極メテ稀ナリ、三四ノ油層アリテ穿孔鐵管ヲ使用シ採油セリ

B O C會社ノ最良井ト稱スヘキモノハ掘止當時一晝夜三百「パーレル」ヲ噴出セルモノアルモ忽チニ減少シテ自流井トナリ、普通數十「パーレル」ヲ出油セルモノ最モ多ク汲上唧筒ヲ以テ採油セリ、本官ノ親シク觀察スル所ニヨレハ汲上唧筒ハ一分間ノ「ストローク」二十二ニシテ毎「ストローク」ニ五勺乃至一合位ノ油量アル油井ヲ以テ最モ普通トスルカ如シ、若シ果シテ然ラハ本油田ニ於ケル一油井ノ一晝夜ノ產出高ハ十六石乃至三十二石、平均二十四石内外ニシテ總產出高ハ一萬六七千石ト見テ可ナラン、本油田ニハ尙多少ノ手掘井殘存シ何レモ土人ノ所

有ニ屬セリ、其深サ二百五十呎乃至三百呎ニシテ稀ニ三百五十呎ニ達スルモノアリト云フ、而シテ其一日ノ出油量ハ一井約二石ニ過キス本油田ノ最近四年間ニ於ケル産出高ヲ舉クレハ左ノ如シ

年 別	數 量 (ガロン)	價 額 (留比)
一九〇八年	一二三、七九八、六三〇	七一、一七、七二六
一九〇九年	一八七、〇四三、八〇〇	一、〇七、九九、二九五
一九一〇年	一七四、九六七、二九八	一、〇一、〇二、〇三七
一九一一年	一六六、四九四、三一九	九六、一二、八三六

本表ニヨレハ千九百九年以來本油田ハ其産出高ニ於テ多少減少ノ傾向アレトモ尙緬甸全産出額ノ七割五分ヲ占メ緬甸第一ノ主要油田ナリトス、本油田ニ於ケル油井ノ出油量ニ就キ「ネットリング」氏ノ千八百八十六年ヨリ千八百九十年ニ至ル五個年間ノ研究ニヨレハ一年中産油量ノ最モ少キハ一月ヨリ三月ニシテ一般ニ二月ヲ以テ最モ少量ナリ

トス、而シテ三月ヨリ五月マテ漸次増加シ五月ヨリ八月ニ至ル間ヲ以テ一年中最モ產出多量ナル時トシ就中八月ニ最モ多シ、爾後十二月ニ至ルマテ漸次減少ス、此事實ハ大體ニ於テ緬甸ノ季候ト特別ノ關係アルコトヲ示スモノニシテ乾季ニハ最少量、雨季ニハ最多量ノ出油アリ、而シテ尙深ク之ヲ推究スレハ本油田ノ產油量ハ「イラワヅヂイ」川水面ノ高低ニ關係ヲ有スルモノ、如ク該河ノ水量最少ノ時期即チ二月ニハ出油量最少ニシテ該河ノ水量ノ最大ナル時期即チ八月ニハ出油量モ亦最多ナルノ時ナリ

鑿井及採油 鑿井法ハ米國式綱掘ニシテ我國ニ於ケルモノト異ナル所ヲ見ス、櫓ハ高サ七十二呎ニシテ「チーク」材ニ似タル堅牢ノ材木ニテ組立テ此等ノ材料ハ遠ク「イラワヅヂイ」川ノ上流ヨリ運搬シ來ルモノナリ、油井ノ多數ハ「ワイヤー、ロープ」ヲ用フト雖モ亦「マニラ、ロープ」ヲ使用スルモノ少ナカラス、B O C 會社「エヂェント」ノ語ル所ニヨレハ本油田ニ於テハ掘鑿ニ要スル此等ノ機械器具一式ヲ備フルニ約千五百磅ヲ要

スト云フ、燃料ニハ本油田ニ産スル劣等ノ原油ヲ用キ油井ヨリ發生スル瓦斯ヲ以テ之ヲ補ヘリ、用水ハ凡テ「イラワッヂイ」川ヨリ唧筒ヲ以テ汲上ケ之ヲ使用ス、機械運轉ノ動力ハ普通蒸氣機關ニシテ「オイル、エンヂン」ヲ使用スルモノアレトモ本油田ニテハ尙未タ僅カニ三四十臺ヲ算フルニ過キス

鑿井者ハ米國人ニシテ一井一人ヲ附シ之ニ人夫十人ヲ添フルヲ原則トス、然レトモ人夫ノ巧拙ニヨリ時トシテハ十二三人ヲ使用シ時トシテハ七八人ヲ使用スルモノアリ、而シテ主任者即チ鑿井者ハ終日鑿井ヲ監視シ少時モ油井ヲ離ル、コトナク其注意ト勤勉トハ實ニ賞スルニ値セリ、就業時間ハ午前七時ヨリ午後五時マテニシテ日曜日ハ休業シ特別ノ事情アルニアラサレハ夜業ニ從事セシムルコトナシ、隨テ掘鑿上一般ニ困難ヲ生スルコトナク或鑿井者ノ語ル所ニヨレハ一年間ニ二坑半ノ油井ヲ掘鑿セリト云フ、是ヲ以テ之レヲ觀ルトキハ鑿井ハ比較的遅々タルカ如キモ斯ル炎天酷熱ノ地域ニアリテハ又已ムヲ得

サルヘシ

含油層ハ千呎内外ヨリ以下二三層アルヲ以テ穿孔鐵管ヲ用キテ各層ノ油ヲ管内ニ集メ汲上唧筒ニテ採油ス、然レトモ一井ニ一機關ヲ附スルモノ多ク頗ル不經濟ナル採油法ヲ行ヘリ、唯「ベーム」方面ニ於テハ「Endless wire rope」ヲ用キテ數多ノ「パンピング、ロツド」ヲ働カシムルモノアリ、採油ハ晝夜絶エス之ヲ行ヘリ

「ツキンゴン」區ノ北端ニ目下一臺ノ可搬式鑿井機械ヲ以テ油井ノ掘鑿ニ従事スルモノヲ見タリ、此方法ハ比較的少額ノ費用ヲ以テ足レリト雖モ僅カニ八九百呎ノ深サヲ限度トスルモノニシテ好果ヲ得サルモノ、如シ

手掘法ハ現今已ニ禁止セラレタレハ之ヲ見ルコトヲ得ス、唯殘存ノ油井ニ就テ之レヲ檢スルニ方五六尺ノ井戸ニシテ橫板ヲ用キテ土止ヲナス、瓦斯ニ對スル準備トシテハ英國製ノ送風唧筒ヲ備ヘ又井底ニ下ルモノハ送風管ヲ附ケタル「ブリキ製ノヘルメツト」ヲ以テ頭全部ヲ被

井掘手ノ人土田油ンアツンナエ旬緬

機風送ハルタリ掛リ倚ノ人テリアノモキ如ノ箱ニ方左
リナトツメルヘルタケ附チ管風送ハルアニ根ノ木又央中



フ、然レトモ此等ノ装置ハ漸ク
近年ニ至リ使用セラル、モノ
ニシテ往時ハ何等ノ準備モナ
ク唯多數ノ人夫短時間ニ交代
入井セルモノ、如シ、是レ本油
田ノ手掘井カ多ク二三百呎ノ
浅井ニ終ハリシ所以ナランカ、
手掘井ノ採油法ハ極メテ簡單
ナリ、即チ油井ノ縁リニ二個ノ
又木ヲ對立セシメ横棒ヲ渡シ
其中央部ニ車ヲ附着シ之ニ綱
ヲ掛ケ其一端ニ二個ノ連結シ
タル石油罐ヲ結ヒ附ケテ井中
ニ垂下シ他ノ一端ヲ女人夫ニ

曳カシメ以テ原油ヲ汲取ス、其原油ハ小ナル溜池ニ入レテ水ヲ切り更ニ石油罐ニ移シ一牛車ニ約二百「ヴイス」ヲ積ミテ「ニヤンフラ」ニ輸送ス、其運賃百「ヴイス」ニ付八安ナリト云フ

輸送 油井ヨリ採取シタル原油ハ坑場附近ノ「タンク」ニ蓄ヘ夫レヨリ唧筒ヲ用キ四吋乃至八吋ノ鐵管ニテ「ニヤンフラ」ノ貯油場ニ流送ス、同地ニB O C會社ハ二百萬「ガロン」入二個、百萬「ガロン」入八個ノ「タンク」ヲ建設シ之ヨリ「ラングーン」製油場ニ至ルマテ二百七十五哩ノ間ハ十吋鐵管ヲ布設シテ送油ス、然レトモ他ノ會社ハ「ニヤンフラ」ニテ油槽船ニ移シ「イラワヅヂ」艇隊會社ノ汽船ニ曳カシメ「ラングーン」ニ下セリ、本油田ニ於ケル手掘井所産ノ一部ハ原油ノ儘直チニ土民ノ燈火用トシテ其附近ノ村落ニ販賣セラル、モノアリ

油質及價格 本油田ノ原油ハ深淺ニヨリ稍其比重ヲ異ニセルモノ、如ク「ネットリンダ」氏ノ調査ニヨレハ左ノ如シ

深サ

二七、四—四五、七米

比重

〇、九二〇九

同 四六、〇—六一、〇 同 〇、九四六五
 同 六一、〇—七六、〇 同 〇、九〇〇一
 同 七六、〇—九一、〇 同 〇、八九二一
 同 九一、〇—九五、〇 同 〇、八八五八
 同 九六、六一—二二一、六 同 〇、八八二三
 以上ハ手掘井若クハ淺キ鑽井ノ産油ニ就キ試験セルモノニテ一般ニ
 深サヲ増スト共ニ比重小トナリ且ツ「パラフィン」ノ含量大ナリト云フ、又
 或記録ニ載セタル本油田原油ノ分析結果ハ左ノ如シ、是レ素ヨリ深ク
 信ヲ措クニ足ラサレトモ亦一般ノ性質ヲ推察スルニ足ルヘシ

揮發油	ナ	フ	タ	一三、〇
ベ	ト	ロ	ル	一、五
ベ	ン	ジ	ン	七、〇
油	ケ	ロ	シ	三、五
燈	燈	油	油	六〇、〇

「ジュー、パラフィン」 一〇、〇

パラフィン 固キ「パラフィン」 五、〇

軟カキ「パラフィン」 三、〇

「コークス」及水 一〇、〇

本官ノ採取セル原油ハ暗褐色ニシテ緬甸坑場ニ於テハ稍濃厚ナル液體ナリシカ本邦着ノ上之ヲ檢スルニ殆ント固結セリ、是レ恐ラクハ揮發分ノ發散ト本邦ノ冷氣ノ爲メ「パラフィン」ノ凝結セルモノナラシ、右原油ノ比重ヲ檢スルニ手掘井ヨリ採取セルハ〇、八六九三、機械井ヨリ採取セルハ〇、八五六〇ナリ

原油ノ價格ハ百「ウイズ」即チ約一「バーレル」ニ付四留比八安ナリト云フ人夫 本油田ニ使役スル人夫ハ年々増加シ總數四千四百六十七人ナリ、就業時間ハ午前六時ヨリ午後五時ニ至ル十一時間ニシテ一日ノ賃銀八安ナリト云フ、人夫ハ緬甸人及印度人ニシテ前者ハ主トシテ鑿井夫ニ使用シ後者ハ多ク汽罐場、採油、番人等ニ使役シ彼等ノ間ニ自ラ特

性アルモノ、如シ

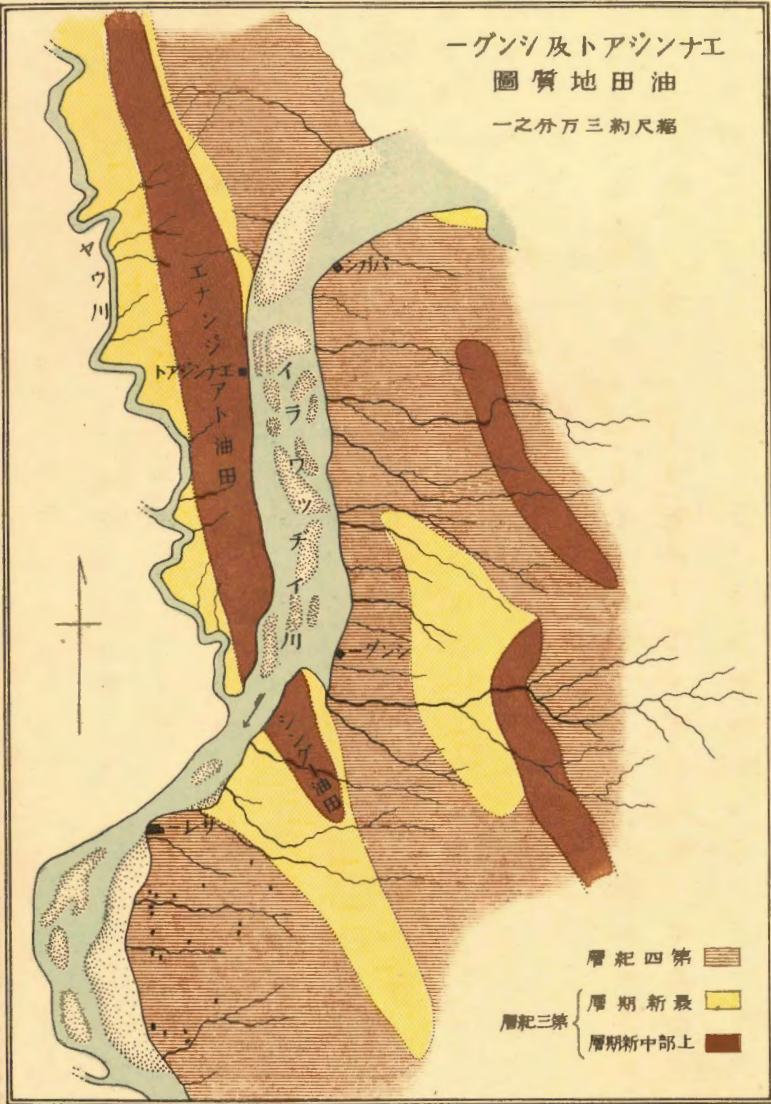
雜觀 坑場ニハ事務所ヲ設ケ二三ノ事務員物品ノ受渡、採油等ニ關スルコトヲ處理ス、事務所ノ傍ニ機械工場、倉庫等アリ、「ニヤンフラ」ノ「エヂェン」ト「ハ」一週間三四回坑場ヲ巡視シ鑿井其他總テノ事業ヲ監督ス

鑿井者ハ合衆國若クハ加奈太ヨリ傭聘セルモノニシテ坑場附近ニ粗末ナル社宅ヲ築造シ一軒ニ二家族ヲ住居セシムルアリ、其俸給ハ通常一ヶ月四五百留比ナリト云フ、會社ノ事務員ハ多ク「ニヤンフラ」ニ住居シ其事務所、社宅ノ如キハ木造ナリト雖モ壯麗ナル建築ヲナシ周圍ニ廣キ庭園ヲ設ケ多大ノ費用ヲ以テ酷熱ニ對スル設備ヲナシ又俱樂部、運動場等ヲ設ケ居住者ノ娛樂場トナス

坑場ニハ數百ノ井櫓林立シ人馬ノ往來頻繁ナリ、火災ノ恐レアルヲ以テ其中央ニ火見櫓ヲ設立シ常ニ二人ノ番人ヲ附シ晝夜絶エス火災ノ注意ヲ怠ラサラシム、是レ未タ本邦ノ油田ニ見サル所ナリ、又坑場ニハ發電所アリテ夜業ニハ總テ電燈ヲ使用ス

本油田ハ「エナンジア」ノ上流約三十五哩「イラワッヂイ」川ノ左岸ニ位ス、
「エナンジア」地方ト同シク河水上ニ三百尺ノ臺地ニシテ地層ハ上
部中新期ニ屬スル褐色頁岩及砂岩ノ互層ヨリ成レリ
本油田ハ今ヲ去ルコト十餘年前ノ發見ニ係リBOC及ROC會社ノ
鑛區アリ、然レトモ當時活況ヲ呈スルハBOC會社ノ鑛區ナリトス、河
岸ニ沿ヒテ二十餘坑ノ油井散在シ河船ヨリ之ヲ望メハ北々東ニ走ル
カ如クナレトモ實際ハ南北ニ走リ其延長三四哩ニ互レリト云フ、本油
田ノ世ニ知ラル、ニ至リタルハ千九百二年ニシテ翌千九百三年ニハ
五百五十萬「ガロン」ヲ產出シ、千九百四年ニハ急ニ二千三百五十萬「ガロ
ン」ニ増進シ、千九百七年ニハ急激ナル發展ヲ遂ケ其所產四千三百五十
萬「ガロン」ニ上レリ、然ルニ其翌年ヨリ俄ニ減少シ年々衰微ノ傾向アリ
シカ昨年即チ千九百十一年ニ至リ石油會社ノ努力功ヲ奏シ再ヒ產額
ヲ増セリ、千九百八年以來ノ產額左ノ如シ

エナシエトアシンナエ
油田地質圖
縮尺三萬分の一



	産	額 (ガロン)	價	格 (留比)
一九〇八年		四三、〇四八、九四八		二六、九〇、五九九
一九〇九年		三七、一六九、〇六一		二三、二三、〇六六
一九一〇年		三一、五二四、一七五		一九、七〇、二六一
一九一一年		五〇、五六四、七六五		三一、六一、六九五

當時本油田ニ使役セラル、人夫ハ約四百六十人内外ナリト云フ

三、「エナン」シアト「油田」

本油田ハ「バコック」州ニ屬シ「シング」油田ノ上流約十五哩「イラワ」川ノ右岸ニアリ、三十餘年前ヨリ土人ハ溪間ニ淺井ヲ穿掘シ或ハ露頭ヨリ採油セリト云フ、就中最モ多量ニ出油セルハ「エナン」ヂヤン「溪間」ナリトス

本油田附近ノ地勢ハ前記三油田地方ト稍趣ヲ異ニシ南北ニ走レル一帯ノ山脈ヲナシ高サ七八百呎ニ達ス、而シテ水蝕作用ニヨリ多クノ横

谷ヲ作り之ヲ遠望スレハ幾多ノ山峯相聳エ鋸齒狀ヲナス、又山麓ハ概
ネ崖壁ヲナシテ川ニ臨ミ河岸ニハ殆ント平地ナシ、本油田ヲ構成スル
地層ハ中新期ニ屬シ硬軟交雜セル砂岩ヨリ成リ頁岩ヲ介有シ一條ノ
背斜ヲ形成シ其軸ハ南北ニ走り延長三四哩ニ互レリ、背斜ノ西翼ハ十
五度乃至二十度ノ傾角ヲ以テ緩斜スレトモ其東翼ハ六七十度ニ急斜
シ且ツ背斜軸ニ沿ヒ斷層ヲ生シ之落シタルカ如キ觀ヲ呈セリ、油井ハ
背斜ノ西翼ニ沿ヒ殆ント二三哩ニ互リ散列シ百二十餘坑ヲ算スレト
モ約二割ハ廢井ニ屬ス

本油田ハ千八百九十一年BOC會社ノ開發ニ係リ鑛區ハ殆ント全部
同會社ノ所有ニ屬シ「エナンジアト」ニ事務所、社宅及小規模ノ製油場ア
リ、時々精製シテ「プローム」、マングレイ地方ニ輸送販賣スト云フ、本油田
ト「シングー」トノ間ニハ川ヲ横キリテ四吋及六吋ノ二條ノ鐵管ヲ布設
シ前者ハ「シングー」ヨリ瓦斯ヲ送り燃料ニ供シ、後者ハ「シングー」ヲ經テ
「ニャンフラ」貯油場ニ原油ヲ流送スルモノナリ

本油田ハ千八百九十一年開發以來三四年ノ間ハ漸次産出高ヲ増シ其
 後急速ノ發展ヲナシテ千九百三年ニハ其所産二千三百五十萬ガロン
 ニ上リシモ爾來次第ニ衰微セリ、千九百五年以後ノ産額ヲ擧クレハ左
 ノ如シ

	産 額 (ガロン)	價 額 (留比)
一九〇五年	一八、七五九、八一八	
一九〇六年	一三、一七二、一三六	
一九〇七年	八、四〇七、八二五	
一九〇八年	六、四七二、五四五	
一九〇九年	六、一一九、九三四	
一九一〇年	四、九四二、三〇八	
一九一一年	四、四七六、〇七四	二、五六、五三八

本油田ハ地下ノ地質構造錯亂セルニ由リ充分ナル見込ヲ以テ掘鑿シ

難キト及本油田ノ原油ハ燈油分及燃料油ニ富ムト雖モ「バラフィン」ヲ含有セサルトヲ以テ會社ハ寧ロカヲ「エナンジアン」油田ニ集中シ爲メニ衰微セリト云フ、當時本油田ニ使役セル人夫ハ八百人内外ナリ

四 「ミンプー」油田

「エナンジアン」ノ下流二十哩「イラワッヂイ」川ノ右岸ニ位スル「一都會ヲ」ミンブー」ト云フ、其附近ニ近時開發セラレタル油田ヲ「ミンブー」油田ト稱ス、「ミンブー」州ニ屬ス

本油田ノ地質ハ中新期層(灰色又ハ褐色頁岩及帶綠色軟砂岩)及最新期層(砂岩ノ厚層ニシテ蠶岩及頁岩ヲ挾有ス)ヨリ構成セラレ南北ニ走レル一ノ背斜軸アリテ中新期層ハ其中央部ニ現出セリ、古來「ミンブー」ニハ泥火山アリテ石油ノ痕跡ノ存スルコトハ既ニ世人ノ知ル所ナリ、十餘年前ヨリB O C會社ハ此地方ノ試掘ニ著手シ昨年始メテ豐富ナル油層ニ掘當テタリ、現鑛區ノ大部分ハB O C會社ノ所有ニ屬シ昨年ノ產出高ハ六十三萬二千四百五十八「ガロン」(價額三九、五二八留比)ニ上レ

レリ、油井ハ六七坑ニシテ深サ六七百呎、其一井ヨリハ掘止當時四百「バ
ーレル」ヲ噴油セリト云フ

以上油田ノ外「イラワツヂイ」川筋ニテハ「プローム」ヨリ上流三四十里ノ「テ
イテミヤウ」地方ニテ試掘シ昨年千三百十五「ガロン」ノ産油ヲ見將來囑
望スヘキ油田ナリト稱セラル、B O C 會社ハ其他「Mahaling」(「ミンジヤン」州)
Kyaukyau Kyong 上流(「バロク」州)及「チンリン」等ニ試掘シタレトモ好果ヲ收
メスシテ廢止セリト云フ

之ヲ要スルニ「イラワツヂイ」川流域ニテハ「エナンジアン」油田最モ活況ヲ
呈シ緬甸所産ノ大部分ヲ占ムルト雖モ今ヤ油井密集シ其間隔ハ殆ン
ト規定ノ最小限度ニ垂ントシ深掘ノ外既ニ發展ノ餘地ナキモノ、如
シ、又「エナンジアト」油田ハ既ニ老境ニ陥リ將來最モ望ヲ囑セラル、モ
ノハ「シングー」油田ニシテ其他ノ産油地ハ尙試掘時代ニ屬シ其發展未
タ期スヘカラス、然レトモ緬甸諸石油會社ハ現今廣ク「イラワツヂイ」流域
ノ調査ニ從事シ試掘施行中ナルヲ以テ或ハ一大油田ノ發見セラル、

ナキヲ保セス

五 「アラカン」州ノ産油地

緬甸ノ西海岸ナル「アキアブ」及「ラマリ」島ノ「キヤクピユウ」附近ニハ所々ニ産油地アリテ多少採油セルモノアリ、其産額ヲ舉クレハ左ノ如シ

	一九〇八年	一九〇九年	一九一〇年	一九一一年
アキアブ	三五、六六七	二四、七五八	二二、二五八	一九、六三〇
キヤクピユウ	四六、三七二	三九、〇六四	三三、五四四	三六、九七〇

「アラカン」州「サンドウェイ」ヨリ採取セル原油ハ褐色稀薄ノ種ニシテ比重〇、八三一五ナリ

結 尾

茲ニ蘭領印度并ニ英領緬甸ニ於テ視察セル所ノ要領ヲ摘記スレハ左ノ如シ

一 蘭領印度ニ於ケル石油ノ生産額ハ千九百十年ノ統計ニ據レハ總計百五十萬噸内外ニシテ其後年々増加セリ、今回調査ノ結果ニ依レハ現今一日ノ生産額ハ大約左ノ如シ

「ボルネオ」島

二、五〇〇—三、〇〇〇噸

瓜 哇 島

六五〇

「スマトラ」島

一、〇〇〇

即チ總計五千五百噸内外ニシテ一年間二百萬噸(我千二百餘萬石)内外ト見做セハ大差ナカルヘシ

一 蘭領印度ニ於ケル精製燈油ノ輸出高ハ千九百十年ニ於テハ四億八千九百餘萬リター「我二百六十餘萬石」ニ上リ輸出先ハ英領印度、海峽殖民地、支那、日本及濠洲等ナリ、此他新嘉坡港外「サムボ」島ノ貯油場ニ貯蓄シ仕出地ノ狀況ニヨリ之ヨリ輸出スルモノ、如シ

一 蘭領印度ニ於ケル石油ノ製造力ハ大約左ノ如シ

「ボルネオ」島「バリ」バン「製油場

一日

一、三〇〇噸

瓜哇島「ヲノクロモ」製油場

詳カナラサレトモ當時數十噸ヲ上ラサルヘシ

同 「ヂュプー」製油場

一日 二五〇噸

同 「スマラン」製油場

小規模ニシテ時々製油ニ従事ス

「スマトラ」島「ダンジョン、プーラー」製油場

一日 四〇〇噸

同 「バンカラン、ブラシダン」製油場

不詳

「バンカラン、ブラシダン」ヲ合セテ大約四千噸以上ニ達スヘシ

一 蘭領印度ニ於ケル油田ノ最モ主要ナルモノハ「ボルネオ」島東海岸

ニアリ、其生産額ハ前項ニ記載セルカ如クニシテ、年々發展シ近キ將來

ニ於テ米油ト覇ヲ東洋市場ニ争フニ至ルヘシト信ス

一 當時蘭領ノ石油業ハ「バターフシエー」石油會社ノ爲メニ殆ント統

一セラル、ニ至レリ

一 英領緬甸ニ於ケル石油ノ産額ハ千九百九年ニ最多額ヲ示シ二億

三千三十餘萬「ガロン」(我五百七十五萬餘石)ニ達シ昨年ハ二億二千二百

餘萬「ガロン」(我五百五十五萬石)トナレリ、之ヲ以テ直チニ衰微ノ兆トナ

スヘカラサレトモ大體ニ於テ其發達ノ絶頂ニ達セルモノト云フヘシ
一 英領緬甸ニ於ケル一日ノ石油製造力ハ諸製油場ヲ合シテ大約一
萬九千五百「バーレル」(我一萬九千五百石)ナリ

一 英領緬甸ニ於ケル精製燈油ハ國內ノ需用ニ充テ他ハ悉ク英領印
度ニ輸出セリ

一 英領緬甸ニ於ケル油田ノ重ナルモノハ「エナンジア」ニシテ最モ
活況ヲ呈セリト雖モ深掘ノ外既ニ發展ノ餘地ナク「エナンジア」ハ
既ニ老境ニ陥リ將來最モ望ヲ囑セラル、ハ「シング」油田ナリ

一 緬甸并ニ蘭領印度ノ石油會社ハ何レモ絶エス専門家ヲ諸方ニ派
出シテ石油ノ調査ヲナシ少シク有望ト認ムレハ直チニ試掘ヲナシ新
油田ノ開發ニ努力スルコト本邦事業者ノ企及スル所ニアラス、特ニ「ポ
ルネオ」ノ如キ產出過多ナルニ拘ラス尙大ニ試掘ヲ施行シ遠大ノ計劃
ヲナスモノ、如シ

本報告ニ記載セル度量衡比較

盾 <small>クルア</small> 蘭領印度ノ通貨	約八拾錢
仙 <small>セン</small> (同)	約八厘
磅 <small>ポンド</small> 英國通貨	約九圓八拾貳錢
弗 <small>ドル</small> 海峽殖民地ノ通貨	約壹圓拾五錢
留 <small>ルビ</small> 比英領印度ノ通貨	約六拾四錢
安 <small>アンナ</small> (英領印度ノ通貨、十 六安ナチ一留トス)	約四錢
哩 <small>マイル</small>	十四町四十五間
呎 <small>フット</small>	一尺〇〇五
「エーカー」	四段二十四步
「ヘクタール」	一町二十五步
「リーター」	五合五勺
「ガロン」(英)	二升五合二勺

「パーレル」

「ヴァイス」(緬甸ノ量目)

噸ト

封度ガンド

緬甸ニテハ四十ガロ
 ンチ一パレルニシ
 我ハ百六十リルニ
 テハ一十リルニシ
 八斗八升ニ當リ我
 百ヴァイスハ四十
 リン即チ我一石ニ
 其原ハ約二百七十
 噸モヨリ各異ナ
 石三斗ニ當レリ我
 百二十夕九五

島オネルホ
地油採ガンサガンサ



井油ガンサガンサ
フ覆テ之テ以テ皆ノ「プツタア」部全ハ樅



景全ノ場油製ンパマリ

場油製ハルテ立ノ突煙所務事ハ物建ルス接ニ「クンタ」方右
リナ場造製蠟「ニフランプ」ハルユ見ト朧朧、テ隔チ海ニ面前

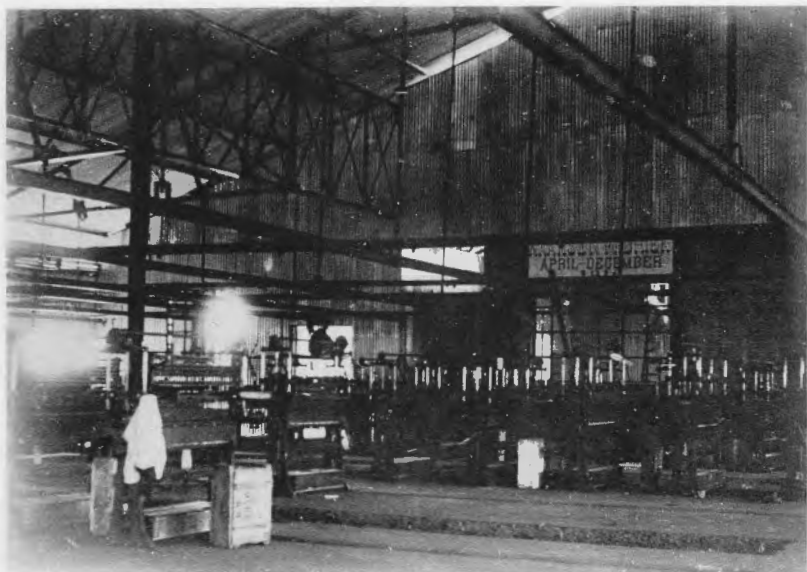


ンパマリ

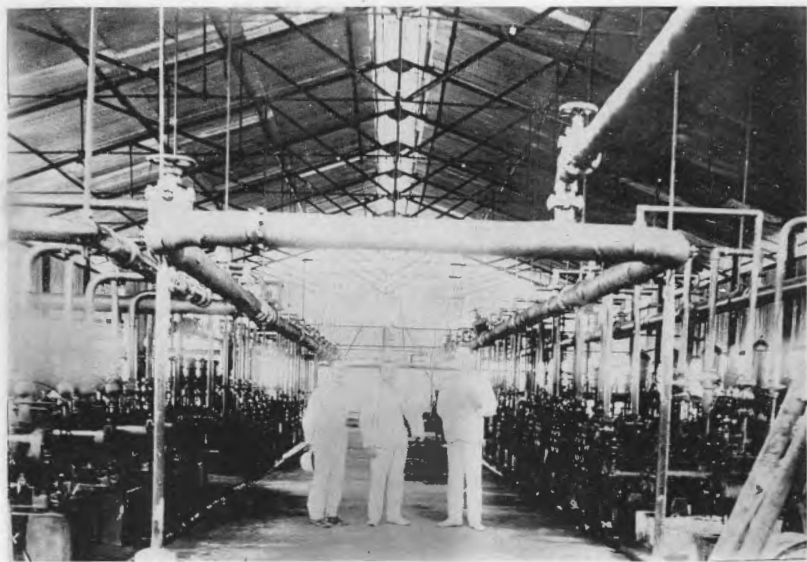
角岬ル至ニ街市「ンサダンラケ」リヨ場油製
リセ出露層互ノ岩頁岩砂ニ處此



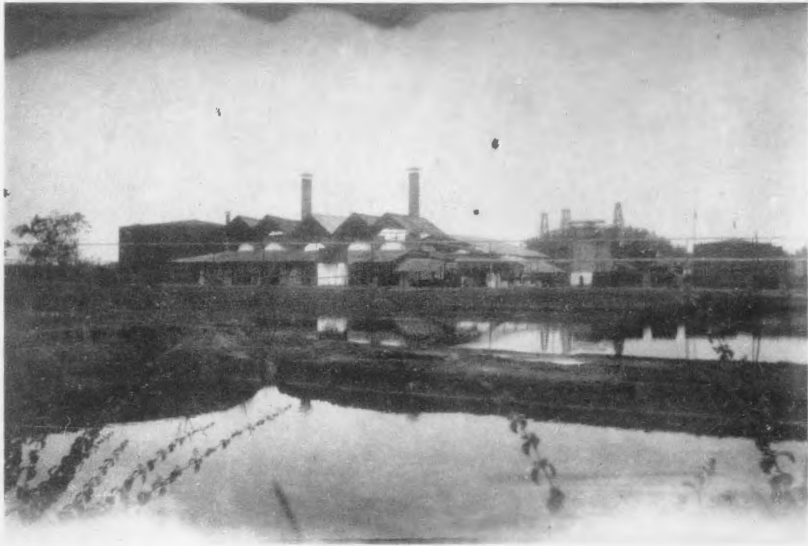
ンパバリバ
場造製燭蠟



ンパバリバ
室「ポンボ」ノ場油製



場油製モロクノチ



場油製 - プユチ



緬甸エナツンア油田
ベーム坑區



緬甸エナツンア油田
ウツイゴン坑區全景



大正二年三月二十五日印刷
大正二年三月二十八日發行

定價金壹圓

著作權所有

農 商 務 省

印刷者 田 中 市 之 助
東京市神田區通新石町三番地

印刷所 陽 堂
東京市神田區通新石町三番地
電話(本局九七〇)

發賣所 陽 堂
東京市神田區通新石町三番地
振替口座東京貳參四參六番